

# 研究紀要

## 第31号

- 古墳時代前期の炉石状土製品について  
—市ノ塚遺跡・エグロ遺跡の事例と類例の集成— ..... 神林幸太朗
- <小特集>栃木市伯仲1号墳と下毛野南西部の古墳時代
- “栃木沖積低地”周辺の古墳  
—伯仲1号墳の位置づけをめぐって— ..... 秋元陽光
- 横穴式石室からみた下毛野南西部の社会関係  
—伯仲1号墳を中心に— ..... 荒井啓汰
- 永野川流域の古墳時代大刀と馬具  
—栃木市伯仲1号墳とその周辺地域を考える— ..... 内山敏行

2023

公益財団法人とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター

## 研究紀要 第31号 目次

目次 ..... ( i )

古墳時代前期の炉石状土製品について  
—市ノ塚遺跡・エグロ遺跡の事例と類例の集成—  
..... 神林幸太朗 ( 1 )

<小特集>栃木市伯仲1号墳と下毛野南西部の古墳時代  
“栃木沖積低地”周辺の古墳  
—伯仲1号墳の位置づけをめぐって—  
..... 秋元陽光 ( 19 )

横穴式石室からみた下毛野南西部の社会関係  
—伯仲1号墳を中心に—  
..... 荒井啓汰 ( 25 )

永野川流域の古墳時代大刀と馬具  
—栃木市伯仲1号墳とその周辺地域を考える—  
..... 内山敏行 ( 33 )



# 古墳時代前期の炉石状土製品について －市ノ塚遺跡・エグロ遺跡の事例と類例の集成－

かんばやしこうたろう  
神林幸太朗

## はじめに

- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| 1 栃木県内の炉石状土製品  | 4 炉石状土製品の出現と展開       |
| 2 関東地方の炉石状土製品  | 5 栃木県における炉石状土製品分布の背景 |
| 3 炉石状土製品の特徴と機能 | おわりに                 |

古墳時代前期の集落遺跡である、市ノ塚遺跡とエグロ遺跡から出土した「棒状の土製品」について、類例の集成および検討を行った。その結果、これらの土製品は関東地方で広くみられる、地床炉の一端に炉石を設置する構造の一類型である可能性が考えられた。また、この土製品については弥生時代に房総地域で出現し、古墳時代前期に北関東地域に拡散する傾向が確認できた。栃木県内においてこの種の土製品が存在する背景には、房総地域に由来する人や情報の広がりの一端を反映しているものと思われる。

## はじめに

弥生時代～古墳時代の前にかけて、屋内炉の一端に「枕石」「縁石」「炉石」などと呼称される自然石（以下炉石）を設置する炉（以下石添炉）が確認される。関東地方では弥生時代中期ごろには一部地域で散見され、弥生時代後期にはほぼ全域に展開するとされる（合田 1988）。また古墳時代になると東北地方でも確認される。筆者は現在、こうした構造の炉が東北地方に波及する過程の検討を行っているのだが（神林 2019・2023）、その作業の中で、一部地域において炉石を模したとみられる土製品を設置する炉が存在すること知った。この土製品については、報告書における事実記載にとどまり、基礎的な研究は行われていない。また、栃木県内でもこうした土製品とみられる遺物が出土しているが、ほとんど注目されていない。

そこで本論では炉石を模したとみられる土製品（以下炉石状土製品）について、栃木県内の資料を概観するとともに、関東地方における事例を集め、基礎的な事項に関する検討を行う。そして炉石状土製品の特徴や、栃木県において存在する背景について考えてみたい。

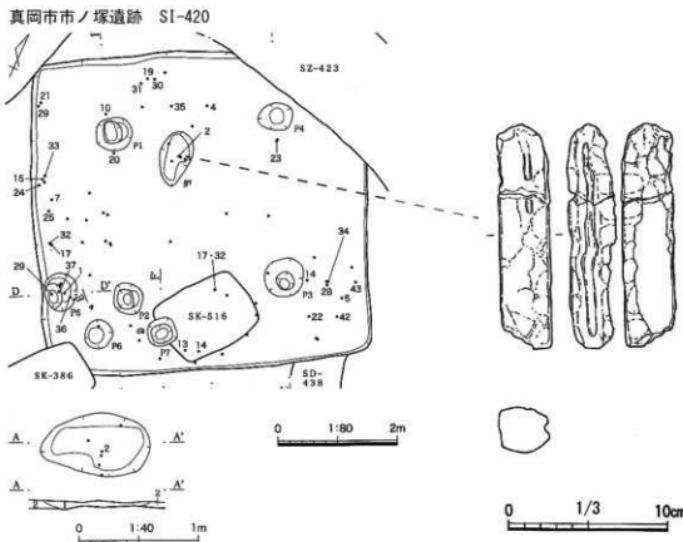
## 1. 栃木県内の炉石状土製品

### (1) 真岡市市ノ塚遺跡（第1図）

**遺跡の概要** 栃木県の南東部に位置する真岡市に所在する。市内を南北に流れる小貝川左岸の台地上に立地している。経営体基盤整備事業に伴う発掘調査で、古墳時代前期から中期前にかけての竪穴建物跡が100軒近く確認されており、大規模な集落跡であることが判明した。また玉造りの工房跡や小型の青銅鏡などが確認されており、有力者層を伴う地域の拠点的な集落である可能性が考えられる。

#### ① 1区 SI-420

**遺構の概要** 5.5 × 5.3m の隅丸長方形の竪穴建物跡である。竪穴内には4本の主柱穴のほか、複数の小穴が確認されている。本遺構からは粗削の石材や管玉・石製模造品の未製品、砥石などが出土しており、玉造り



第1図 栃木県の事例（1）

の工房跡と考えられている。炉跡は主柱穴間に位置しており、長軸0.9m、短軸0.5mの楕円形である。深さ7cmほどの深さに掘り窪められており、底面は良く焼けている。

**炉石状土製品の特徴** 1点出土しており、報告書では棒状土製品として報告されている。出土状態についての記載や写真はみられないが、出土位置が平面図に示されており、炉の中央付近から出土したことが分かる。片方の端部を欠損しているが、全体の形状は長細い棒状で、断面形は方形となっている。大きさは遺存長14.3cm、幅3.3cm、厚さ2.9cm、重量153gである。胎上には砂粒や小礫が含まれている。色調は橙色を呈しているが、片面（掲載図の正面）にはスララしき炭化物が薄く付着しており、やや黒ずんでいる。反対側の面にはこうした黒ずみは認められない事から、おそらくこの面を上または火床側に向けて設置していたものと思われる。表面には指頭圧痕が多数認められ、側面には指頭圧痕を撫で消そうとした痕跡が認められた。おそらく粘土塊を手づくねによって棒状に成形し、指で撫でる程度の調整を施したものと思われる。

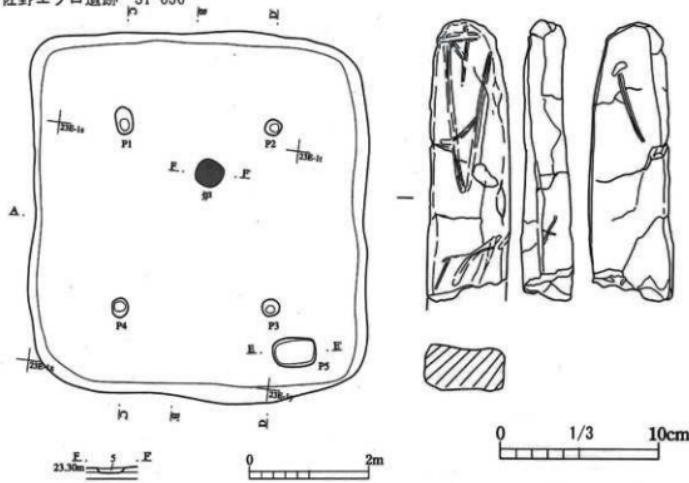
## （2）佐野市エグロ遺跡（第2図）

**遺跡の概要** 栃木県南西部に位置する佐野市に所在する。市域を南北に流れる三杉川沿いの低地に面した台地上に立地している。佐野新都市開発整備事業に伴う発掘調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡が40軒以上確認され大規模な集落跡であることが判明した。この遺跡の北側には多数の竪穴建物跡や前方後方墳が確認された松山遺跡が所在している。

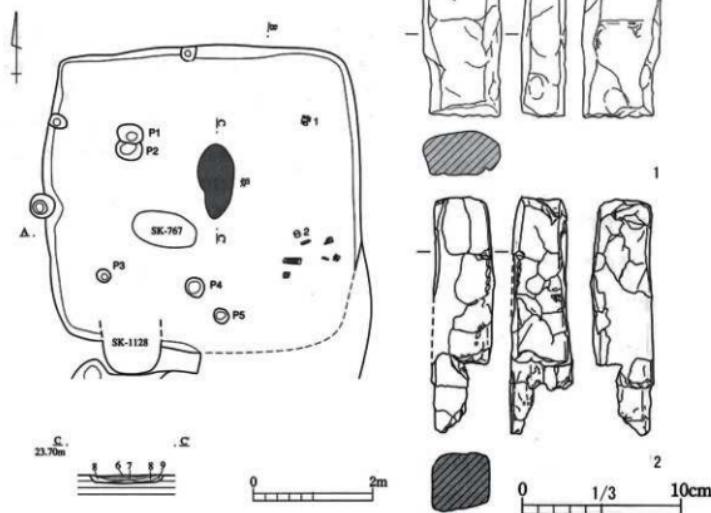
### ①第636号住居跡

**遺構の概要** 6.2×5.6mの隅丸長方形の竪穴建物跡である。竪穴内には4本の主柱穴と貯蔵穴が確認されて

佐野エグロ遺跡 SI-636



佐野エグロ遺跡 SI-739



第2図 栃木県の事例（2）

いる。炉跡は竪穴中央からわずかに北側に寄った位置に存在する。規模は直径48cmで、浅い皿状の掘り込みが認められている。掘り込み内部には焼土を主体とした橙褐色土が堆積しており、掘り込み底面および周辺の床面が焼土化している。

**炉石状土製品の特徴** 1点出土しており、報告書では棒状の土製品として報告されている。出土状態に関する図や写真は掲載されていないが、本文中の記載によると内から出土しており、炉との関連が伺える遺物とされている。片側を欠損しているが、平面形は長細く、断面形は長方形で、全体としては長細く扁平な棒状となっている。大きさは遺存長17.3cm以上、幅4.9cm、厚さ2.5cm、重量280gである。胎土は少量の砂粒を含んでおり、また表面に植物繊維とみられる痕跡が認められることから、繊維を含有していたものとみられる。色調はにぶい橙色を呈している。なおススなどの炭化物の付着は認められない。

#### ②第739号住居跡

**遺構の概要** 4.9×4.7mの正方形の竪穴建物跡である。ほぼ全面に地山由來のロームブロックを含む貼床が施されている。竪穴内には柱穴とみられるいくつかの小穴が存在するが、どれが主柱穴かは判然としない。貯蔵穴も認められていない。炉跡は竪穴中央に位置しており、長軸120cm、短軸60cmの規模である。深さ12cmほどの浅い掘り込みを有し、内部には焼土を主体とした土が堆積し、底面および周辺は焼土化している。

**炉石状土製品の特徴** 2点出土しており、いずれも報告書では土製品として報告されている。出土状態に関する図や写真は掲載されていないが、本文中の記載によると2点とも炉に近接して出土したとされている。1は片側の端部を欠損しているが、端部形状は丸みを帯びている。断面形は丸みを帯びた長方形で、全体としては長細く扁平な棒状の形態となっている。大きさは遺存長10.6cm以上、幅5cm、厚さ2.8cmである。胎土はわずかに砂粒を含んでおり、色調は橙色を呈している。2も片側の端部を欠損しているが、端部形状は1と異なり直線的となっている。断面形は正方形で、長細い角柱状の形態となっている。大きさは遺存長10.5cm以上、幅3.5cm、厚さ3.5cm、胎土はわずかに砂粒を含んでおり、色調は橙色を呈している。ススなどの炭化物は認められないが、割れ方をみると熱によって爆ぜたような状況を示している。

## 2. 関東地方の炉石状土製品

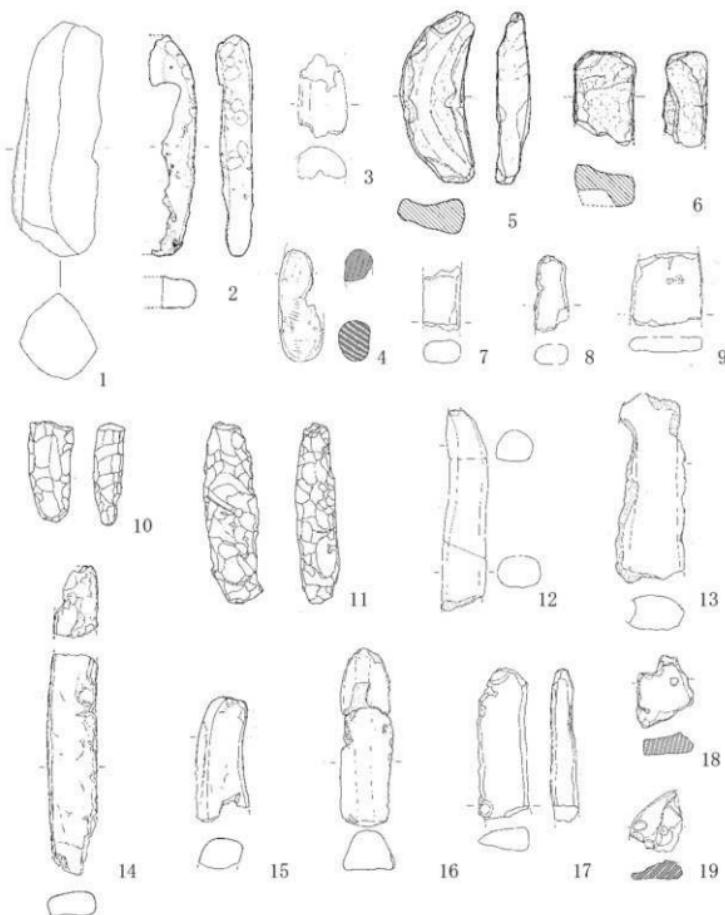
### (1) 千葉県域（第3図）

全体で7遺跡19点の事例を確認した。時期は弥生時代中期と古墳時代前期の2時期で、弥生時代後期の事例は確認できていない。なお本地域は炉石状土製品が最初に確認された地域とみられる。最初に報告された千葉市域の腰遺跡の報告書（千葉県文化財センター1979）では、「（前略）その出土状態より考え、炉内における枕具に供されたと思われる。」と記載されている。一方でその形状から煮沸器を持ち上げる「支脚」「支脚状土製品」として報告している例もいくつか確認できる。また草刈遺跡I区の報告書（千葉県教育振興財團2011）では「土製炉開い」という名称で報告されており、詳細な説明は無いものの、「支脚」とは異なる機能と認識した名称もみられる。

**弥生時代中期** 第3図1～9はいずれも中期後半にあたる宮ノ台式期の事例である。遺跡別の出土数では市原市草刈遺跡で3点、千葉市域の腰遺跡と木更津市美生遺跡群でそれぞれ2点、佐倉市大崎台遺跡と市原市大腰遺跡でそれぞれ1点出土している。調査面積や竪穴建物跡の数を考慮しても、遺跡によって大きな偏りは認められない。

確認された炉石状土製品はほとんどが欠損品であり、全形が判明するのはわずかである。

1の大崎台遺跡の事例は全長29.6cm、幅9.5cm、厚さ10.8cmで円柱または角柱状となっており、報告書



- |                   |                     |                    |
|-------------------|---------------------|--------------------|
| 1. 大崎台遺跡 121号住    | 2. 美生遺跡群 II 7号住     | 3. 美生遺跡群 I 199号住   |
| 4. 大瓶遺跡 38号住      | 5・6. 城の腰遺跡 87号住     | 7・8. 草刈遺跡 I区 136号住 |
| 9. 草刈遺跡 I区 40号住   | 10・11. 戸張作遺跡 144号住  | 12. 草刈遺跡 A区 1号住    |
| 13. 草刈遺跡 A区 70号住  | 14・15. 草刈遺跡 K区 70号住 | 16. 草刈遺跡 K区 489号住  |
| 17. 草刈遺跡 I区 110号住 | 18. 下鈴野遺跡 21号住      | 19. 山田橋大山台遺跡 97号住  |

(縮尺 1/6)

第3図 炉石状土製品集成（千葉県）

では「支脚状土製品」と記されている。炉の縁から出土しており、隣接する土器片とともに埋設された状態で設置されていた。なお欠損品である3の美生遺跡の事例もこれに近い形状とみられる。

2の美生遺跡の事例は全長28cm、遺存幅6cm、厚さ3.9cmで、炉中央に埋設されていた。大崎台遺跡の事例と近い長さであるが、厚さが4cmと薄く、扁平な棒状となっている。欠損品である4の大脛遺跡の事例や、7~9の草刈遺跡の事例はこれに近似した形態とみられる。

5・6の城の腰遺跡の事例は炉縁付近から2点並んで出土している。このうち全形が判明する5は、長さが22cmほどと短く、平面形は三日月状をしている。一方の6は欠損品であるが、平面形・断面形から角柱状を呈するものとみられ、形状の異なるものを2点並べて設置したものとみられる。

**古墳時代前期** 第3図10~19が該当する。遺跡別の出土数では市原市草刈遺跡が6点、千葉市戸張作遺跡が2点、市原市下鈴野遺跡と山田橋大山台遺跡がそれぞれ1点となっている。ほとんどが市原周辺の遺跡、特に草刈遺跡から出土している点は特徴的である。同じ市原市域における大規模遺跡群である上総国分寺台遺跡群（中台遺跡・南中台遺跡など）では確認されていない。地域的特徴というよりは、特定の遺跡に集中する傾向と捉えられる。ただし草刈遺跡についても調査された堅穴建物跡の軒数に比べれば出土数はごくわずかである。弥生時代の事例と同様に欠損品がほとんどだが、比較的全形を窺える資料が多い。

10・11は戸張作遺跡の事例で炉の中央から2点並んで出土している。完形とみられる11は長さ16.2cm、幅5cm、厚さ3.2cmで、全面に指頭圧痕がみとめられることから、手づくね成形されたとみられる。欠損している10も遺存している部分の特徴は11とほぼ同一であることから、同形同大のものを2点並べて設置したとみられる。

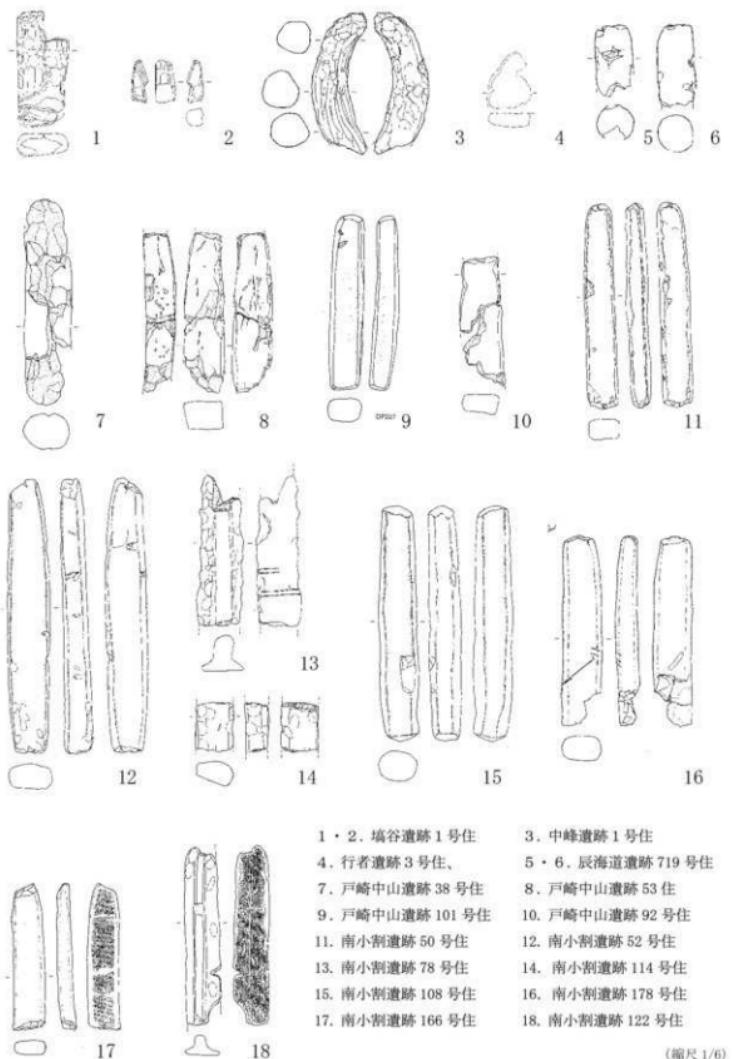
12~17は草刈遺跡の事例である。ほとんどの資料が幅5~6cm、厚さ3~4cmほど、長さはK区70号住で約39cmと扁平で長細い棒状の形態となっている。ただしK区489号住の事例は長さ22.6cm、幅6.4cm、厚さ5cmで、三角柱状を呈している。出土状態が不明な資料がほとんどだが、出土位置が明示されているものについては炉の縁や中央から出土し、炉の長軸方向に直交するように設置されている。なおA区1号住(12)やK区489号住(16)では炉石状土製品とともに、炉の中央付近からいわゆる「鳥帽子型土製支脚」が出土している。炉石状土製品と支脚類の機能を考える上で示唆的な事例である。

18・19はともに市原市に所在する下鈴野遺跡・山田橋大山台遺跡の事例である。小片であるが、厚さ2~3cmと扁平な形状をしており、前述した事例と同様の形状となるとみられる。

## (2) 茨城県域（第4図）

全体で6遺跡23点が確認されており、今回集成したなかでは最も事例が多い地域である。時期についてはいずれも古墳時代前期のものである。名称については、茨城県ではじめて確認された南小潮遺跡の報告書（茨城県教育財團1998）において「土製炉石」という名称が付けられており、その後の報告書でも「炉石形土製品」や「炉粘土板」といった炉に関連する土製品という認識の呼称が多くみられる。遺跡別の出土数では茨城町南小潮遺跡で12点、かすみがうら市戸崎中山道遺跡で6点、つくば市辰海道遺跡で3点、稲敷市中峰遺跡、笠間市行者遺跡・塙谷遺跡でそれぞれ1点ずつとなっており、千葉県域と同様に特定の遺跡に集中する傾向が窺える。

1・2は塙谷遺跡の事例である。炉の中央から2点並んで出土している。遺存状況の良い1は残存長14.7cm、幅6.6cm、厚さ2cmと扁平な棒状の形態となる。外面にはナデや指頭圧痕が認められ、割れ方は被熱によって破碎したようみえる。



- 1・2. 塙谷遺跡 1号住  
3. 中峰遺跡 1号住  
4. 行者遺跡 3号住  
5・6. 辰海道遺跡 719号住  
7. 戸崎中山遺跡 38号住  
8. 戸崎中山遺跡 53号住  
9. 戸崎中山遺跡 101号住  
10. 戸崎中山遺跡 92号住  
11. 南小割遺跡 50号住  
12. 南小割遺跡 52号住  
13. 南小割遺跡 78号住  
14. 南小割遺跡 114号住  
15. 南小割遺跡 108号住  
16. 南小割遺跡 178号住  
17. 南小割遺跡 166号住  
18. 南小割遺跡 122号住

(縮尺 1/6)

第4図 炉石状土製品集成（茨城県）

3は中峰遺跡の事例である。遺存長17.9cm、幅6.9cm、厚さ4.7cmで、指頭圧痕とナデ調整の痕跡が認められている。断面形は梢円形であるが、平面形は三日月状に湾曲しており、前述した千葉県城の腰遺跡の事例に近似している。また小片だが4の行者遺跡の事例も同様のものとみられる。

5・6は辰海道遺跡の事例で、炉の中央から2点並んで出土している。いずれも欠損品だが、直径5cmほどの円筒形をしている。

7～10は戸崎中山遺跡の事例で、この他に図示されていないものが2点存在する。形態はいずれも扁平で長細い棒状となっており、7のみ断面形がややつぶれた梢円形となっている。大きさは長さ22.5～26.2cm、幅5.1～6.1cm、厚さ2.6～4.6cmで、形態および大きさが比較的揃っている。出土状態が示されているものでは炉の中央から出土している事例が多い。

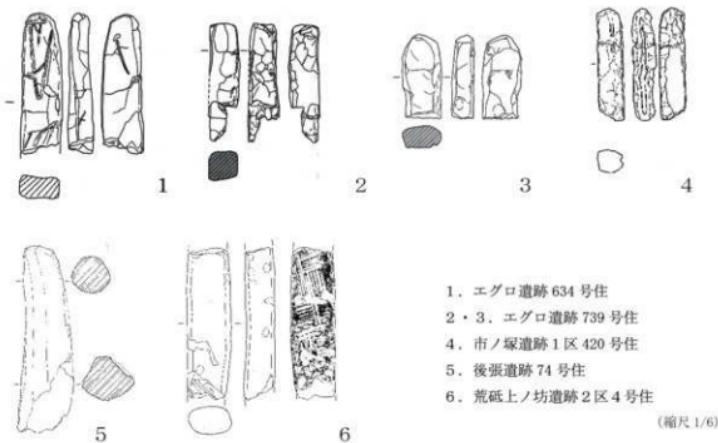
11～18は南小割遺跡の事例で、この他に図示されていないものが4点存在する。形態は扁平で長細い棒状のものがほとんどであり、長さは完形品で25.7～34.5cm、幅は3.8～5.9cm、厚さは1.8～4.5cmとなっている。また図13・18のように、断面形が逆T字状となる本遺跡でしかみられない形態のものも存在するが、全体として形態・大きさは揃っている。出土状態が示されているものでは、炉の縁または中央の2つが存在し、それぞれほぼ同数認められた。また143号住では炉石状土製品(図示されていない)のほかに粗製器台(炉器台)が街内から出土しており、炉石状土製品と器台類の機能を考える上で示唆的である。

### (3) 栃木・埼玉・群馬県域 (第5図)

いずれの県も事例が少ないと一括した。報告書内の名称については、その外見から「棒状土製品」「土製品」などと呼称されている。時期は全て古墳時代前期である。

1～4は前述した栃木県の事例である。市ノ塚遺跡で1点、エグロ遺跡で3点確認されている。

5は埼玉県北部に位置する本庄市後張遺跡の事例である。片側の端部を欠損しているが平面形はやや湾曲



第5図 炉石状土製品集成 (栃木県・埼玉県・群馬県)

し、断面形はややつぶれた梢円形となり、前述した茨城県中峰遺跡（第4図-3）の事例に近似している。出土位置は地床炉に近接した位置で、が石とみられる自然石と並べられたような状態で出土している。

6は群馬県南部に位置する前橋市荒砥上ノ坊遺跡の事例である。両端を欠損しているが、遺存長19.2cm、幅5.6cm、厚さ3.4cmで、長細く扁平な棒状の形態になるものとみられる。が石に近接した位置から出土している。

### 3. 炉石状土製品の特徴と機能

#### (1) 形態的特徴（第6図）

炉石状土製品の平面形は細長く棒状となるものが多く、稀に三日月状に湾曲するものが認められる（第3図1-5・15、第4図-3、第5図-5など）。断面形状は長方形で扁平となるものが主体であるが、ほかに方形や円形や三角形を基調とし、やや厚みがあり柱状となるものも認められる（第3図-1・16、第4図-5・6・7、第5図-2・5）。また茨城県南小割遺跡では逆T字状のものが認められている（第4図-13・18）。

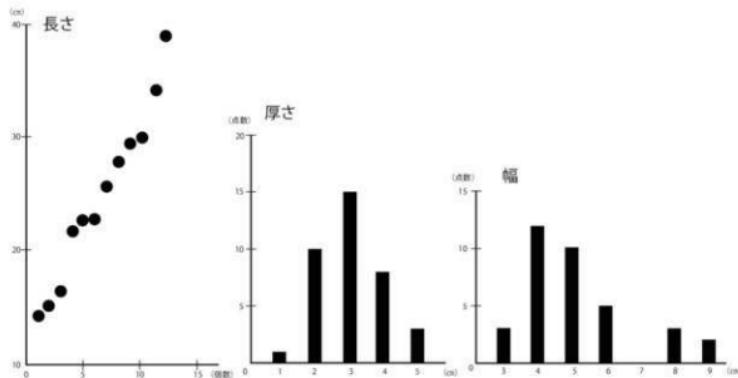
器面にみられる成形・調整の痕跡としては指頭圧痕やナデが多い。輪積み痕などの接合痕は認められることから、粘土塊を手づくねによって棒状に成形し、その後に表面を撫でて形を整える程度の製作方法とみられる。なお一部で胎土に植物纖維痕がみられる事から、纖維が混ぜ込まれる場合もあったのだろう。

大きさについては完形品が少ないため、計測できる部位と資料数にばらつきがある。長さは最小14.2cm、最大39.2cmと大きな開きがあるが、20～30cm前後のものが多い。幅は最小が3cm、最大が9.5cmで、4～5cmのものが一般的であり、厚さは最小が1.8cm、最大が10.8cmで、おおよそ3cm前後の大きさに集中しており、扁平な形状となる個体が主体である。

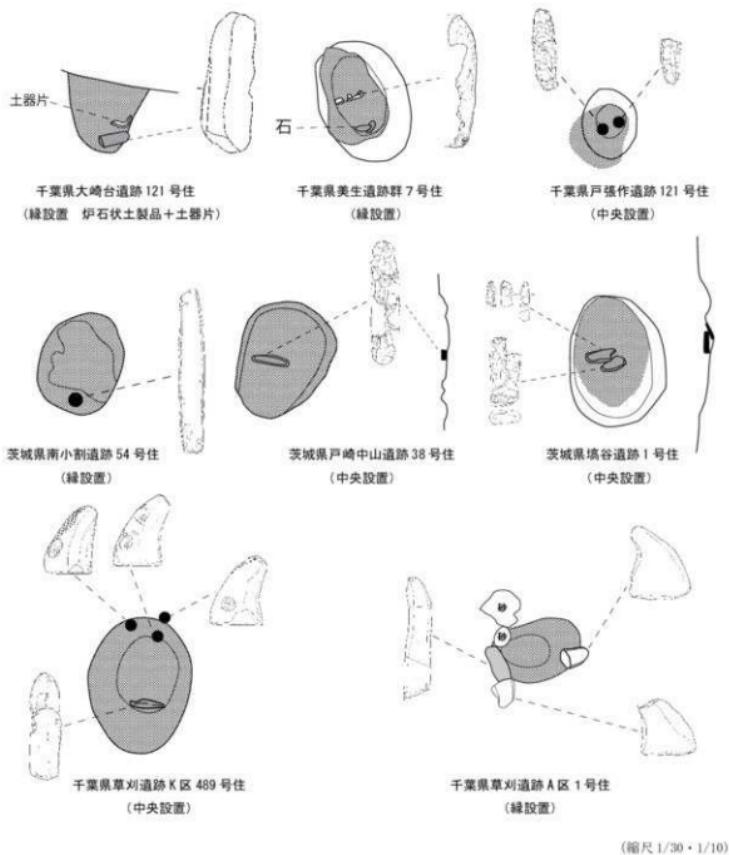
#### (2) 出土状況と設置方法（第7図）

が石または炉周辺における出土位置については、炉の中央に位置する場合と、掘方または火床面の周縁部に位置する場合の2つに分けられるが、中央付近から出土するものが多い。設置方向については、炉の掘方または焼土化範囲の長軸方向に直交するように設置されている。

設置される個数について、大半は1点であるが、千葉県城の腰遺跡、戸張作遺跡、草刈遺跡K-70号住、茨



第6図 炉石状土製品の法量



第7図 炉石状土製品の出土状況

城県塙谷遺跡、栃木県エグロ遺跡 SI-739 では 1 つの炉から 2 点出土しており、出土状況が判明する事例では 2 点を並べ置いたような状況が確認できる。設置方法については個数による差異は認められない。

### (3) 炉石との共通点とその機能 (第8図)

炉石状土製品の形態的特徴や出土状況をまとめたが、まず形態的特徴については一定の共通点やまとまりがあるものの、一方でばらつきも大きい。これはおそらく「細長い棒状の形態」という緩やかな共通認識のもとに製作されたものであり、厳密な規範や作り方の流儀があるようなものではなかったのであろう。あくまで自然石である炉石の代用品として、近似した形態を備えていれば十分であったと考えられる。また出土状況から考えられる設置方法についても、石添炉における炉石と共通する傾向（鶴見 1996、神林 2019）が確



第8図 石添炉と炉石の様相

(縮尺 1/30・1/10)

認された。これらの事から、炉石状土製品の機能は石添炉における炉石と同一であったと考えられる。

ただし肝心の炉石の機能自体が現時点で明確になっているとは言い難い。炉石の機能としては防風設備（杉原 1954）、串焼き調理設備（杉原 1954）、支脚（中村 1990）、燃焼材の空気調整（鶴見 1996）、火力調整（岩瀬 1997、鈴木 2015）などの説が出されており、おおむね煮炊き時の火力や燃焼効率の向上に関する機能が想定されている。炉石状土製品の機能を考える上で示唆的なのは、炉石状土製品とともに土製支脚が出土した千葉県草刈遺跡A区1号住・K区489号住や、炉器台とともに出土した茨城県南小割遺跡143号住の事例である。土製支脚や炉器台は炉内に設置され、煮沸器である甌を持ち上げることで熱効率を上昇させ、煮炊き効率を良くするためのものと推定されている（小林 1974）。

このような事例から、少なくとも炉石状土製品は支脚や器台とは異なる機能のものと認識されていたことが窺える。そして支脚や器台が煮沸器本体を持ち上げる機能を有していたと考えれば、炉石状土製品は薪などの燃焼材に関する機能を有していた可能性が高いと考えられる。

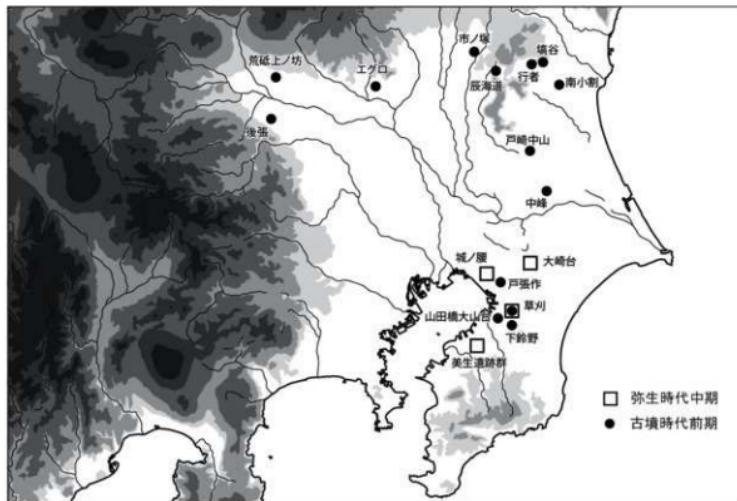
#### 4. 炉石状土製品の出現と拡散（第8・9図）

##### （1）炉石状土製品の出現について

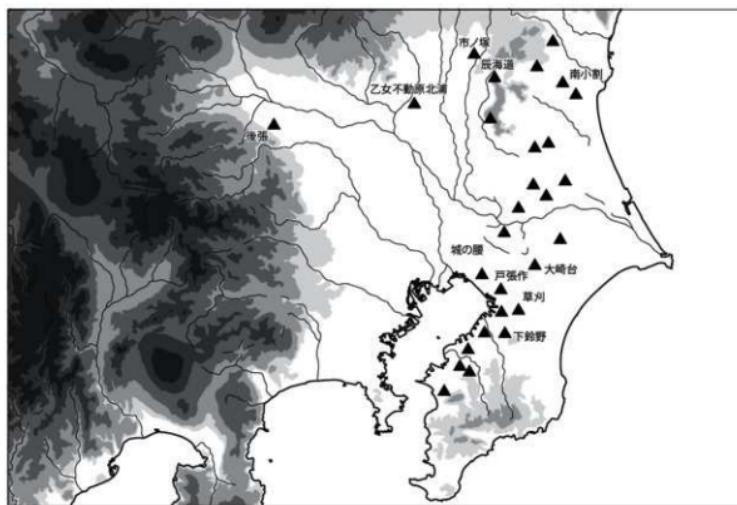
炉石状土製品は弥生時代中期と古墳時代前期の2時期で確認された。このうち弥生時代中期の事例は、現在の千葉県域にあたる房総地域の宮ノ台式期の遺跡でのみ確認されていることから、この地域において炉石状土製品が出現した可能性が高い。ただし、前述の通り炉石状土製品は石添炉の炉石を模してつくられ、同様の機能を有しているのだが、房総地域では安房地域の一部遺跡を除いて基本的に石添炉が認められていない。宮ノ台式期の炉の様相を検討した飯塚氏によれば、東京湾の西岸では石添炉、東岸では土器片を炉石のように設置する土器片添炉や単純な地床炉が多いという地域差が認められるという（飯塚 2005）。また、こうした傾向は弥生時代後期～古墳時代前期でも同様であるという（合田 1998）。おそらくこのような地域においてわざわざ炉石状土製品を作り使用した背景には、房総地域以外の地域や集団の影響があった可能性が考えられる。

##### （2）北関東地域への拡散とその背景

弥生時代に房総地域で出現した炉石状土製品は、古墳時代前期になると北関東地域に拡散することが判明した。この時期の北関東地域では、南関東系の土器群が急速に広がり定着することが指摘されている（比田井 1995・西川 1995など）。例えば茨城県域で最も多く炉石状土製品が出土した南小割遺跡では、交互押捺



第9図 炉石状土製品の分布



第10図 土製支脚の分布

による小波状口縁を有するナデ調整平底甕が大量に出土している。これらの土器は弥生時代の房総地域に出自を持つことが指摘されており（比田井 2012）、この地域の影響を強く受けた集落跡と考えられている。そうした遺跡で炉石状土製品が大量に出土するという事実は、この種の土製品の広がりの背景を考える上で示唆的である。

また「鳥帽子型土製支脚」などと呼称される土製支脚の広がりも、炉石状土製品と近似した様相を示している（図 10）。この土製支脚は弥生時代の西日本において出現したとみられ（小林 1941）、3～4世紀ごろの近畿地方を中心に分布が認められる（大橋 1978、田中 2013）。関東地方では古墳時代前期以降に分布が認められる。特に房総・常陸地域や、さらに東北地方の太平洋沿岸域から日本海側の山形盆地において比較的多く分布が認められる（神林 2023）。なかでも千葉県市原地域に集中する傾向が指摘されており（村山 2011）、筆者は房総地域を起点として関東・東北の各地に広がった可能性を考えている。

このように古墳時代前期には房総地域に由来する様々な事象が、北関東各地に影響を及ぼしており、炉石状土製品の広がりもこれらと同一の現象と捉えられる。こうした現象の背景には、房総地域の人や情報の広がりが反映しているものと考えられる。それとともに、他地域においてもわざわざ炉石を模した土製品を作成して使用した背景には、自身の出自やそれに伴う生活様式に対するこだわりのようなものがあつたものと推察される。

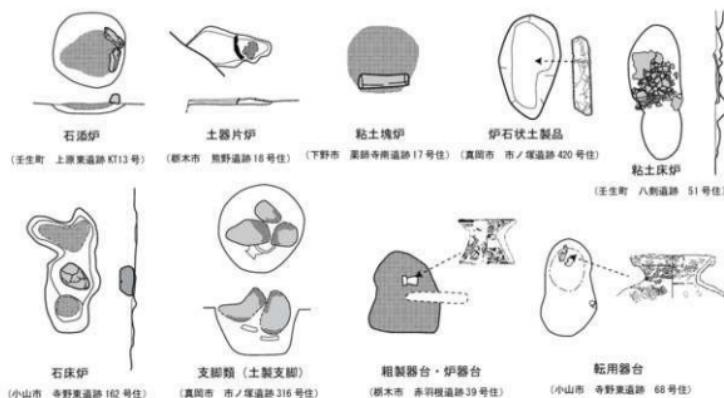
## 5. 栃木県内における炉石状土製品分布の背景

最後に、栃木県の遺跡で炉石状土製品が確認された意味について考えてみたい。

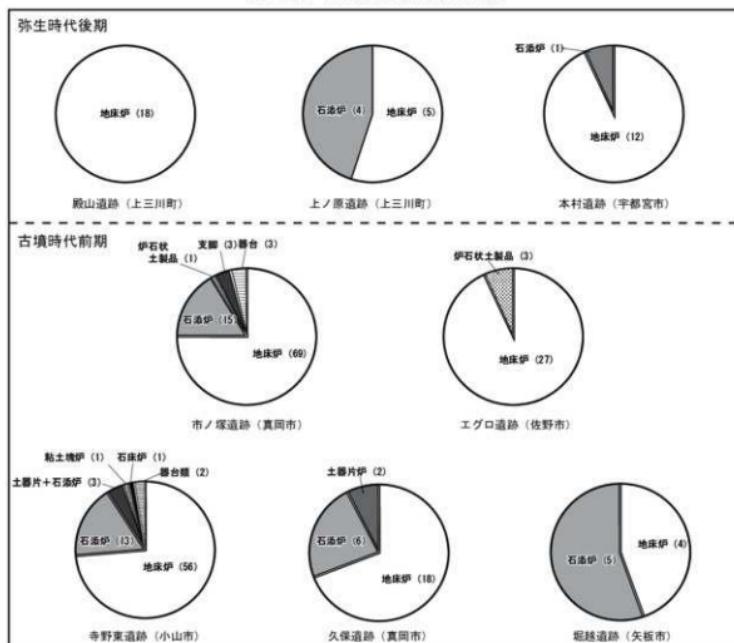
**栃木県における炉の様相** 第 11・12 図には栃木県内の弥生時代後期～古墳時代前期の遺跡で確認された炉の種類の一覧と、比較的多くの窓穴が調査された遺跡における、炉の構成比率を示した。概観すると弥生時代後期は基本的には地床炉を主体とし、一部の遺跡でごくわずかに石添炉が認められる程度である。ところが古墳時代前期になると炉の様相が多様化する。これらの炉はいずれも弥生時代の南関東地域で認められる構造（合田 1998）であることから、これらの地域の影響によるものと考えられる。炉の構成比率では地床炉を主体とし、石添炉が一定の割合で存在するあり方が県内全域で比較的共通している。一方でその他の炉については遺跡ごとの様相差が認められる。

**寺野東遺跡** 例えば県内でも屈指の大規模集落遺跡である寺野東遺跡では、東京都の多摩地域でみられる石床炉（神林 2019、及川 2020）が確認されている。またガラスと土器片を組み合わせる炉や、壺の口縁部を器台に転用した炉も、相模・南武藏地域などで散見される。このように寺野東遺跡の炉の様相は、南関東地方のなかでも、東京湾西岸域の遺跡の様相に近いといえる。

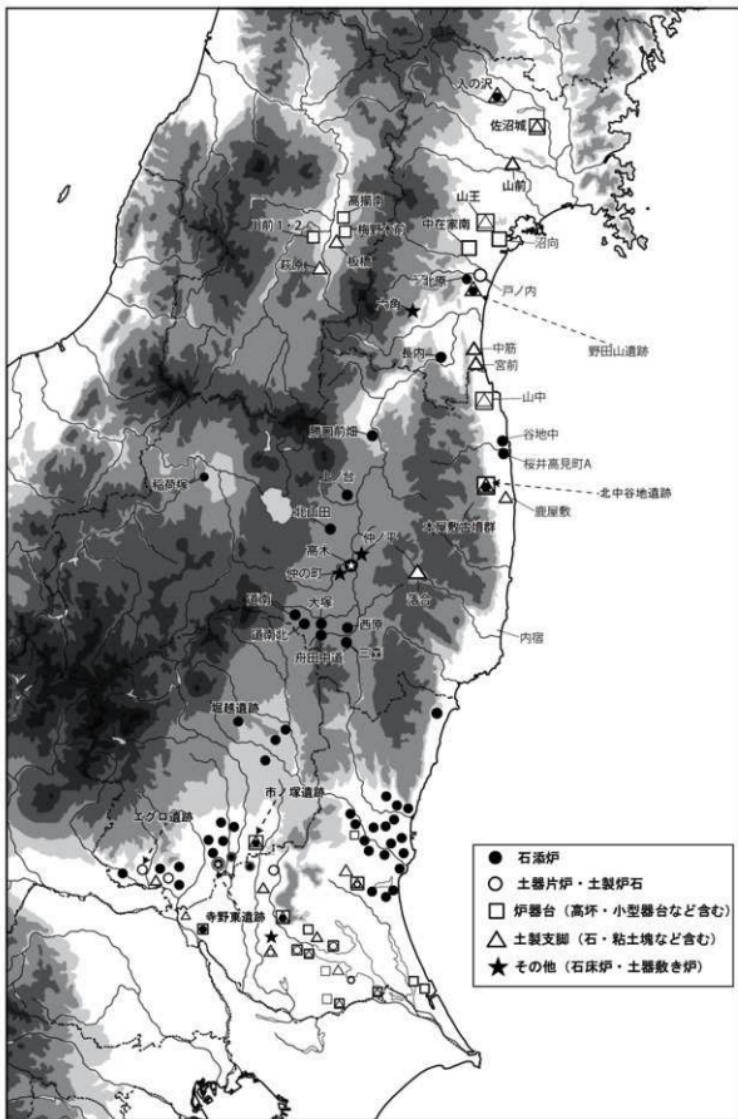
**市ノ塚遺跡** では炉石状土製品が確認された遺跡ではどうだろうか。まず市ノ塚遺跡で確認された炉のうち、地床炉以外の内訳をみると、石添炉が 14 軒、炉石状土製品 1 軒、石添炉+支脚類 1 軒、地床炉+支脚類 2 軒、地床炉+転用・粗製器台 1 軒という構成となっている。このうち土製支脚・器台類については、いずれも房総地域に出自を持つ要素であり、古墳時代前期になると本遺跡に隣接する茨城県の中～南部域を中心で分布が認められる（鶴見 1994）。一方で本遺跡を含む栃木県では石添炉が多く、炉に伴う土製支脚や器台類はあまり多くない。市ノ塚遺跡のように両者が 1 つの遺跡において併存するあり方は非常に珍しい（神林 2023）。本遺跡の立地や性格を考慮すれば、地域の拠点的集落として活発な人や情報の行き来のなかで、隣接地域に広がる房総地域由来の炉の構造がもたらされたものと考えられる。炉石状土製品の存在もこうした交流の一端を示しているものと考えられる。



第11図 栃木県内における炉の種類



第12図 炉の構成比率



第13図 東北・北関東地方の炉の地域性（神林 2023 を一部改変し作成）

**エグロ遺跡** 次に3点の炉石状土製品が確認されたエグロ遺跡はどうだろうか。本遺跡では40軒以上の堅穴建物跡が調査されているにも関わらず、炉石状土製品が出土した竪穴以外はすべて単純な地床炉である。本遺跡に隣接する松山遺跡でも地床炉以外の炉は確認されていない。県内の大規模集落では一定数の割合で石添炉が存在していることを踏まえれば、かなり特異な様相といえる。炉石状土製品が認められている点と、石添炉が存在しないということに注目すれば、房総地域の遺跡の様相に近いようにみえる。この地域の土器編年検討を行った柏瀬拓己氏は、エグロ遺跡出土土器の中に、下総地域の在地の弥生土器の系譜を引く壺が存在することを指摘している。そして平底壺・台付壺の比率なども含めて、本地域の古墳時代社会の成立の背景に、下総地域を故地とする集団の移住を想定している（柏瀬2020）。このように本遺跡は前述した市ノ塚遺跡とはやや異なり、房総地域に由来する集団の直接的な移住によって、彼の地の生活様式（炉の構造）がもたらされた可能性が高い。

**炉石状土製品と炉の多様性** 以上のように、炉石状土製品が確認された2遺跡は、炉や土器の様相から房総地域やそれに由来する文化の影響が強い集落跡である可能性が窺えた。ただし、房総地域からの直接的な影響と二次的な影響など、その背景は多様であることが窺えた。また、炉石状土製品に限らず栃木県域の古墳時代前期集落では、遺跡ごとに多様な炉の様相を示すことが判明した。このような炉の様相からは、この地域の古墳時代集落や社会の成立過程が一様ではなく、さまざまな出自を持つ集団や多様な交流といった複雑な状況のもとに成り立っていた可能性が推測される。

## おわりに

今回は炉石状土製品の集成と基礎的検討から、その様相を明らかにするとともに、栃木県域の古墳時代前期集落の炉の様相について言及した。

当該期の炉は、縄文時代のものと比べると構造的特徴に乏しく、調査方法や記録方法、報告書における図示の仕方が統一されているとは言い難く、今回の集成にあたっても、報告書に記載される情報量に大きな差がある事を実感した。炉に限らず遺構研究の進展のためには、現場での詳細な観察と的確な記録、そして正確かつ他者に伝わる報告が何よりも重要である。あたりまえのことではあるが、今後の遺構研究の進展と、現在埋蔵文化財調査の最前線に立つ自身への戒めとして最後に記しておきたい。

なお本稿の執筆にあたり、角田祥一さん、佐藤有紗さんには資料の収集・閲覧に際してお世話になりました。そして、出向中の身分でありながら、研究紀要に執筆する機会を与えて下さったとちぎ未来づくり財團埋蔵文化財センターの皆様に感謝申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 飯塚美保 2005 「宮ノ台期堅穴住居にみられる地域性」『西相模考古』第12号 西相模考古学会  
岩瀬彰利 1997 「煮炊き実験、炉形態の違いによる煮炊き効率の差について」『考古学フォーラム』8  
大橋信彌 1978 「支脚形土製品の系譜」『古代研究』17 元興寺文化財研究所  
及川良彦 2020 「炉を巡る諸問題 2 石床炉の研究 (3)」『多摩考古』第51号 多摩考古学研究会  
柏瀬拓己 2020 「関東平野北部における古墳出現期の地域相」『考古学集刊』第16号 明治大学考古学研究室  
神林幸太朗 2019 「古墳時代の東北における炉の様相」『福島考古』第61号 福島県考古学会  
神林幸太朗 2023 「古墳時代の東北における炉の様相II」『施櫛林の考古学』II 大竹憲治氏古希記念論文集刊行会  
合田芳正 1988 「炉址小考」『青山考古』第8号 青山考古学会  
小林行雄 1941 「土製支脚」『考古学雑誌』第31卷5号

- 杉原莊介 他 1954『登昌』本編 日本考古学協会  
 鈴木素行 2015「十王台式土器が焼けてから」『ひたちなか埋文だより』42 ひたちなか市埋蔵文化財センター  
 田中清美 2013『鳥獣形土器の検討』『私の考古学』丹羽佑一先生退任記念事業会  
 鶴見貞雄 1994『粗製器台の用途を考える』『研究ノート』第2号 茨城県教育財團  
 鶴見貞雄 1996『炉石住居覺書』『研究ノート』第5号 茨城県教育財團  
 栃木県教育委員会 2009『第23回季別展 ムラからみた古墳時代 古墳時代前期・中期を中心として』栃木県立しもつけ風土記の丘資料館  
 中村倉司 1990『幾形土器から見た弥生社会の地域差』『土曜考古』第15号 土曜考古学会  
 村山 卓 2010(7)まとめ『茨城県福敷市 浮島前浦遺跡 浮島原古墳群 発掘調査報告書』立正大学博物館

## 【分析・図版に使用した報告書】

## 栃木県

- 宇都宮市教育委員会 2004『本村遺跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第49集  
 小山市教育委員会 1982『乙女不動原北浦遺跡』小山市文化財調査報告書11集  
 山武考古学研究所 1996『熊野遺跡』熊野道跡発掘調査団  
 栃木県教育委員会 1979『菜師寺南道路』栃木県埋蔵文化財調査報告書第23集  
 栃木県教育委員会 1984『赤羽根』栃木県埋蔵文化財調査報告書第57集  
 栃木県教育委員会 1992『久保遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第125集  
 栃木県教育委員会 1997『寺野東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第201集  
 栃木県教育委員会 2001『八剣遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第254集  
 栃木県教育委員会 2001『エグロ遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第260集  
 栃木県教育委員会 2005『福越遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第287集  
 栃木県教育委員会 2008『市ノ塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第303集  
 栃木県教育委員会 2015『市ノ塚遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告書第373集  
 日本窯業史研究所 1989『栃木県壬生町 宮の森集落遺跡群』  
 日本窯業史研究所 1992『上ノ原道路・向原南道路』  
 日本窯業史研究所 1997『殿山遺跡』

## 茨城県

- 茨城県教育財團 1998『南小割遺跡 横現堂遺跡 親塚遺跡 後原遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第129集  
 茨城県教育財團 2004『戸崎中山遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第218集  
 茨城県教育財團 2005『辰海遺跡-4』茨城県教育財團文化財調査報告第247集  
 茨城県教育財團 2008『川峰遺跡 児松遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第286集  
 穂野考古学研究所 2011『茨城県笠間市 行者遺跡』  
 穂野考古学研究所 2011『笠間市文化財調査報告書 塙谷遺跡』2

## 千葉県

- 市原市文化財センター 1987『市原市下鈴野遺跡』市原市文化財センター調査報告書16  
 市原市文化財センター 2004『市原市山田橋大山台遺跡』市原市文化財センター調査報告書88  
 君津都市文化財センター 1992『美生遺跡群1』君津都市文化財センター発掘調査報告書71  
 君津都市文化財センター 1993『美生遺跡群2 第4・5・9地点』君津都市文化財センター発掘調査報告書93  
 佐倉市遺跡調査会 1975『大崎台遺跡』  
 千葉県都公社 1974『市原市大坂生跡』  
 千葉県教育振興財團 2007『千原台ニュータウン』17 千葉県教育振興財團調査報告 565  
 千葉県教育振興財團 2011『千原台ニュータウン』26 千葉県教育振興財團調査報告 646

千葉県文化財センター 1979『千葉市域の腰・西屋敷遺跡』千葉県教育振興財團調査報告 22

千葉県文化財センター 1983『千原台ニュータウン』2 千葉県教育振興財團調査報告 58

千葉市埋蔵文化財センター 1998『千葉市戸張作遺跡』1

千葉市埋蔵文化財センター 1999『千葉市戸張作遺跡』2

**群馬県・埼玉県**

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995『荒砥上ノ坊遺跡』1 財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第 193 集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982『後張 関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 13』埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
報告書 15

# “栃木沖積低地”周辺の古墳

## —伯仲1号墳の位置付けをめぐって—

あき もと はる みつ(1)  
秋 元 陽 光

はじめに	4 後期古墳
1 “栃木沖積低地”	5 終末期古墳
2 前期古墳	おわりに
3 中期古墳から後期古墳へ	

横穴式石室を藏する推定60mの前方後円墳である栃木市伯仲1号墳の、地域の中での位置付けを考える。伯仲1号墳の地域を從来“永野川流域”と捉えてきたが、東縁に思川、西縁に永野川が流れる“栃木沖積低地”として捉えて、低地東岸と西岸を個別に検討してきた従来とは別な視点を示す。この低地には古墳前期の山王寺大樹塚古墳があり、低地面を抉んだ東側台地上の牧ノ内遺跡との関係も捉えることができる。大樹塚古墳の後、中期には永野川東側低地にある寒川古墳群の鶴巣山古墳に繼承される。中期から後期にかけて宇都宮南部から小山市北部へ大形古墳が移行する中で、寒川古墳群の首長墓系列が継続して築造され、低地の東側には野木町野波の古墳群も存在する。

古墳後期は栃木低地に首長墓がなく、周縁台地上に築かれる。低地西側の永野川流域で前方後円墳を中心とした群集墳、東側の思川流域では円墳の群集墳が築造される。永野川流域の長50-60m級前方後円墳のうち都賀愛宕塚古墳とオトカ塚古墳は古墳群がある谷を押さえ立地で、これらを統括した存在と考えられる。伯仲1号墳は低地に面し、栃木低地面の下泉古墳群を統括する存在と捉える。古墳終末期の大形円墳である思川東岸台地上の千駄塚古墳は円墳の群集墳である牧ノ内古墳群の勢力伸長とも考えられ、低地西縁部台地に前方後円墳が築かれたこととの差の背景を検討する必要がある。

### はじめに

伯仲1号墳は栃木市大平町大字伯仲と栃木市藤岡町大字蛭沼字三藏に所在する、推定60mの横穴式石室を藏する前方後円墳である。本古墳について2014～2017年にかけて栃木県古墳勉強会により調査を行い、2018・2019年に事実報告を行った（栃木県古墳勉強会2018・2019）。しかし、時間的制約から、調査から得られた様々な課題について検討を加えることはできなかった。本稿は今後刊行が予定される総括報告書に向け、本古墳の地域の中での位置付けを考える上で試論として草する。

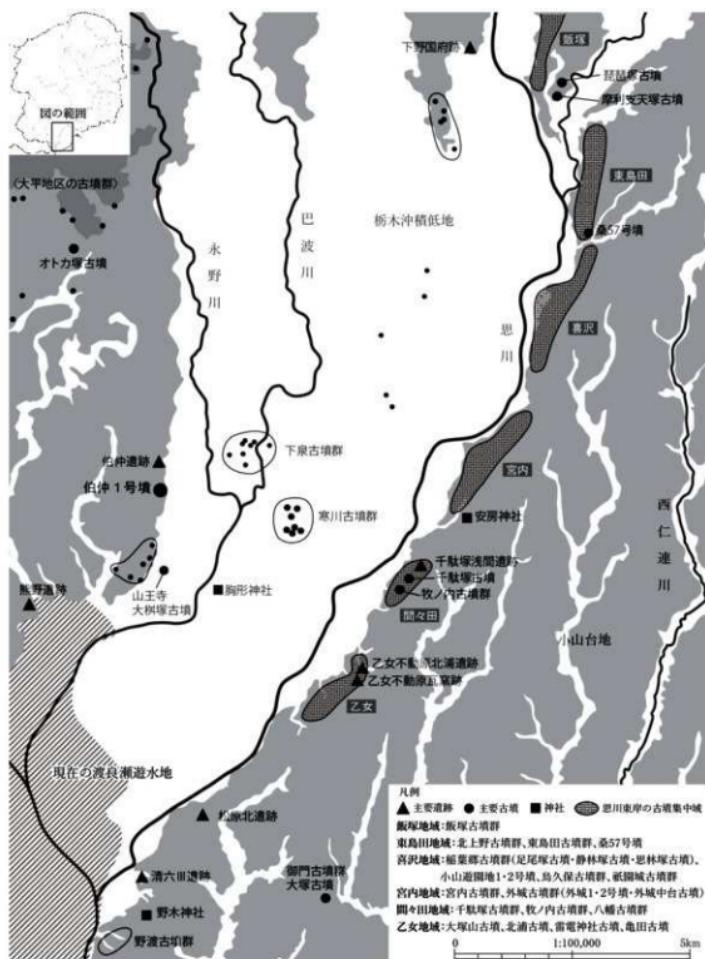
### 1 “栃木沖積低地”

これまで伯仲1号墳を「永野川流域の古墳」と捉えてきたが、永野川流域をもう少し広い視点で捉えたとき、“栃木沖積低地”（以下 栃木低地）西縁を流れる河川と捉えることができる。

栃木低地は栃木県南部に位置し、東縁には思川、西縁には永野川が流れる低地面である。現状では低地面の大半が水田として利用されるが、部分的に古くからの集落が存在し、複雑に低台地が存在すると考えられる。

この低地には古墳時代前期の山王寺大樹塚古墳、中期から後期前半にかけての寒川古墳群、古代における下野国府などが存在する。このような存在に対し、これまで思川・永野川それぞれの流域という認識により

(1) 日本国考古学会会員・栃木県考古学会会員



把握（理解）してきた。しかし、両河川に挟まれた低地を中心に古墳の分布を見ると、これまでとは異なる地域相をうかがうことができる。

## 2 前期古墳

朽木低地において最も早く出現した大形古墳は山王寺大樹塚古墳である。本古墳の築造の背景について、渡良瀬川と思川・永野川の合流地点に近いことがその要因の一つと考える。

渡良瀬川流域沿いには古墳時代前期の主要な古墳が存在し交通の重要な河川であったことは知られるが、思川・永野川流域には顕著な前期古墳は認められない。このような中でこれらの河川が近接する場所に本古墳が築造されたと考えるのである。

本古墳に先行あるいは併行する時期の古墳および集落については、西側台地上の伯仲遺跡・熊野遺跡、低地面を挟んだ東側台地上に存在する牧ノ内遺跡が注目される。特に牧ノ内遺跡では古墳時代前期の方墳（方形周溝墓）23基、住居跡16軒が確認されている。これらの中には明らかに大樹塚古墳に先行する例が認められ、その成立との関係の検討が必要である。また同時期の集落についても、小形古墳と集落の共存、大形古墳との距離的隔絶性などの課題を有する。いずれにせよ、両者をまったく無関係とは捉えることはできず注目しておきたい。

## 3 中期古墳から後期古墳へ

山王寺大樹塚古墳の築造後、北東側約3kmに鶴巻山古墳が築造される。両者の位置は、大樹塚古墳が永野川流域の西側台地に近接するに対し、鶴巻山古墳は低地面のほぼ中央に位置する。両者には一世代程度の時間的間隙が想定され、その間隙を埋める古墳の存在は不明であるが、前方後方墳から円墳へという大形墓の墳形の転換は一様ではなく何らかの事情が考えられる。その事情を現時点で汲み取ることはできないが、朽木低地を治める立場という意味において、大樹塚古墳から鶴巻山古墳にその立場が継承されたと考えておきたい。（注1）

鶴巻山古墳周辺には寒川古墳群と称される首長墓系列と考えられる古墳が存在した。湮滅した古墳を含め、鶴巻山古墳（円 53m 5世紀中）→茶臼山古墳（前方後円 77m 5世紀後）→毘沙門山古墳（造出付円墳 32m 5世紀末）→三味線塚古墳（前方後円 55m 6世紀初）という築造順序が想定される。

この古墳群を含め、5世紀から6世紀にかけての首長墓の動きについては、県内の古墳の動きを見たとき極めて重要な意味を持つ。すなわち、5世紀中葉に宇都宮市南部に当時最大規模の本格的前方後円墳である塙塚古墳（100m）・塙山古墳（前方後円墳 100m）が築かれ、これら勢力が衰退するとともに小山市北部に摩利支天塚古墳（前方後円墳 120m）・琵琶塚古墳（前方後円墳 123m）が出現したと考えられる時期と一致するからである。

	東谷	塙山	飯塙	寒川
5世紀中	帷塚（後円100）	塙山（後円100）		鶴巻山（円53）
5世紀後	鶴舞塚（円53）	塙山西（帆立63）	摩利支天塚（後円120）	茶臼山（後円77）
6世紀前	松の塚（円51）	塙山南（帆立58）	琵琶塚（後円123）	毘沙門山（造出32）
6世紀中				三味線塚（後円55）

（後円：前方後円墳 航立：帆立貝形前方後円墳 円：円墳 造出：造出付円墳）

対応を示すと表のとおりと考えるが、これを見ると宇都宮南部から小山市北部へ大形古墳が移行する中で、宇都宮南部における墳丘規模の縮小化、小山市北部における突然の大形古墳の出現という状況がみられる。一方、寒川古墳群では墳形・規模の変化はあるが、継続して首長墓が築造され続けた。このことは寒川の勢力は大形墳の移動の中で一定の立場を持ち続けていたことを意味し、場合によっては大形墳の移動という事象に深く関わっていたと推定できる。

なお、併行する時期の古墳群として注意しておきたいのが、野木町野渡古墳群である。本古墳群は全て湮滅しており、調査された古墳も皆無であるためその実態は不明であるが、群内から出土したとされる画文帶神獸鏡や鈴杏葉の存在から、寒川古墳群と併行する時期に古墳群形成がなされていた可能性がある。(注2)

#### 4 後期古墳

後期になると、摩利支天塚・琵琶塚古墳を築いた勢力は北へ約3kmに位置する吾妻古墳に引き継がれたと考えられる。吾妻古墳においては基壇・前方部主体部・切石使用石室といいわゆる下野型古墳の特徴が出現し、その後河内・都賀地域ではこのような特徴を共有するしもつけ古墳群が形成される。一方、柄木低地面周辺においてはこのような様相はほとんど見られない。

後期の柄木低地周辺の古墳を見ると、首長墓の築造はほぼ見られなくなる。それと置き換わるように、周縁台地上において多数の古墳が築造される。この中で注意されるのが、低地西側の永野川流域において前方後円墳を中心とした群集墳の展開と、東側の思川流域においては前方後円墳が認められず群集墳のみが築造されることである。

永野川流域の前方後円墳については、都賀愛宕塚古墳(50m?)・オトカ塚古墳(58m)・伯仲1号墳(60m)・西方山6号墳(33m)・圓通寺古墳(30m?)の5基が知られるが、都賀愛宕塚古墳・オトカ塚古墳・伯仲1号墳は埴丘長60m前後と推定されるに対し、西方山6号墳・圓通寺古墳は約30mと両者の差は明らかである。

大形の3基についてみると、都賀愛宕塚古墳は永野川上流域に位置し、旧西方町西部の谷の開口部に立地する。谷の周縁には46基の古墳の存在が指摘され、これらを統括した存在と位置付けられる。オトカ塚古墳は永野川下流域の西寄りに位置し、旧大平町西山田の三方を丘陵に囲まれた谷部の東南部に位置する。谷の周縁には67基の古墳の存在が指摘され、やはりこれらを統括した存在と考えられる。

このように想定し伯仲1号墳を見たとき、同古墳は柄木低地面に直接面するように立地し、前述した二者が谷部を押さえるように立地するとの異なる。このことから、伯仲1号墳は柄木低地面を統括する存在と捉えておきたい。具体的な統括対象と考えられるのは下泉古墳群である。下泉古墳群は低地面に立地し、確認されている古墳は8基である。発掘調査された5・6号墳の石室は旧地表面を大きく掘り込みず、玄室平面形は長方形を呈する、玄室と羨道を明確に区別する施設(玄門立柱石など)をもたない等の特徴を有する。これらの特徴は県央部に見られる飯塚型・藤井型とされる石室とは異なり、伯仲1号墳との類似を指摘できる。

#### 5 終末期古墳

終末期の大形古墳として注目されるのが、思川東岸台地上に築造された千駄塚古墳である。千駄塚古墳は直径70m・高さ10mの二段築成の円墳であり、埴輪を持たず二重周溝をめぐらす。

本古墳の時期については、栃木県南部に展開するしもつけ古墳群との対応から終末期ととらえられてきた。その位置付けには異論はない。しかし、しもつけ古墳群においては前方後円墳(埴輪有)→前方後円墳(埴輪無)

→円墳（埴輪無）という流れの中で説明されるのに対し、千駄塚古墳の周辺には先行する前方後円墳は知られていない。このため、本古墳の築造の背景を從来と同様の理解で説明するのは困難である。

一案として、千駄塚古墳周辺に展開する群集墳である牧ノ内古墳群の勢力伸長と考えることもできる。同古墳群は後期古墳だけでも40基以上が確認され、群集墳としては大型の、直径40mクラスの円墳を複数含む。ただしこのように考えた場合、低地西縁部台地上に前方後円墳が築かれたこととの差が際立ち、その背景の検討が必要となる。

#### おわりに

“柄木沖積低地”を中心に周辺の古墳について述べてきた。この結果、これまで低地東岸と西岸について個別に検討してきた点について、別な視点を提示できたものと考える。無論、検証が必要な事象を多く含むが、今後伯仲1号墳の位置付けを考える上での参考となれば幸いである。

本稿は伯仲1号墳の調査・整理に参加するとともに、小山市千駄塚浅間遺跡の報告書作成を行う中で得られた考えを基として記した。考え方を得る機会を与えてくださった古墳勉強会各位ならびに、作図についても御協力いただいた荒井啓汰氏に御礼申し上げる。

#### 【注】

- 1 方前後方墳から円墳へという流れを周辺で見ると、足利地域において藤本觀音山古墳から動農車塚古墳へ、河内地域において茂原権現山古墳から上神主浅間山古墳という事例があげられる。ただし、墳系の転換は同一系譜の中での單なる形状の転換とは考えられず、勢力の変更なども予想され一定期間の有力古墳の存続時期の空白が生じることも予想される。
- 2 野渡古墳群からの出土が伝えられる遺物として、画文帶神獸鏡（古墳不詳）、鈴杏葉・人物埴輪・円筒埴輪（浅間山古墳）がある。これらの存在から、中期後半から後期前半の古墳の存在が考えられる。

#### 【参考文献】

- 秋元陽光 2016「柄木県赤津川・水野川流域の古墳群」『第21回東北・関東前方後円墳研究会大会・群集墳展開の共通性と地域性』関東・東北前方後円墳研究会  
柄木県古墳勉強会 2018「柄木市伯仲1号墳（長山古墳）調査報告1」『柄木県考古学会誌第39集』柄木県考古学会  
柄木県古墳勉強会 2019「柄木市伯仲1号墳（長山古墳）調査報告2」『柄木県考古学会誌第40集』柄木県考古学会  
(個別の古墳・遺跡に関する報告書は略させていただいた。諾とされたい。)



# 横穴式石室からみた下毛野南西部の社会関係 —伯仲1号墳を中心に—

荒井啓汰<sup>(1)</sup>

## はじめに

- 1 伯仲1号墳の横穴式石室をめぐる状況  
(1) 伯仲1号墳の横穴式石室とその類例  
(2) 伯仲1号墳と永宝寺古墳の共通性

## 2 横穴式石室からみた伯仲1号墳の社会的位置付け

- (1) 伯仲1号墳と永野川流域の横穴式石室  
(2) 足利地域との比較検討  
おわりに

主に6世紀後葉から7世紀前葉の横穴式石室を検討対象として、栃木市伯仲1号墳を中心とした栃木県南西部地域の社会関係を考える。伯仲1号墳は山石を使用する無袖有段構造石室であるが、無袖無段構造の可能性も残る。本稿では石室の伝播や系譜よりも、地域内における石室の共通性や差異性に目を向け、その社会的状況を追及する。

伯仲1号墳と、渡良瀬川南岸の足利市永宝寺古墳の石室は、平面長方形で胸張のない直線的形状で、玄室の法量も近似する。無袖で、複数石材の砾石を有し、玄室に向かって一段下がる。奥壁は大型鏡石の上に小型石材、側壁一段目に比較的大型の石材を横位に用い、持ち送りが比較的弱い。チャートを中心に山石を用い、石室構築過程も共通性がある。復元長57mの伯仲1号墳と長66mの永宝寺古墳は規模も近く、埴輪をもち、6世紀後葉(TK43型式併行期)の造形が想定される。横穴式石室・埴輪規模・時期・副葬品から、両者は類似の社会的・階層的位置にある。

伯仲1号墳の無袖有段構造石室は、周辺地域の永野川流域の立柱石を伴う疑似袖の横穴式石室や、無段無袖石室とは異質で、立地・群構造からも位置付けが異なる。また、両袖石室や胸張形無袖石室が主体となる足利地域における永宝寺古墳の位置付けもやや異質で、立地や階層構造も異なる。このように足利地域における永宝寺古墳と、永野川流域における伯仲1号墳は、類似した社会状況が考えられる。ただし、足尾山塊の山石を使用するので、無関係ではない。伯仲1号墳は、永野川流域の大平・皆川地域と関係をもつてそれとは異なる社会・政治組織で、足利地域における永宝寺古墳と同様のポジションにあったと想定できる。

## はじめに

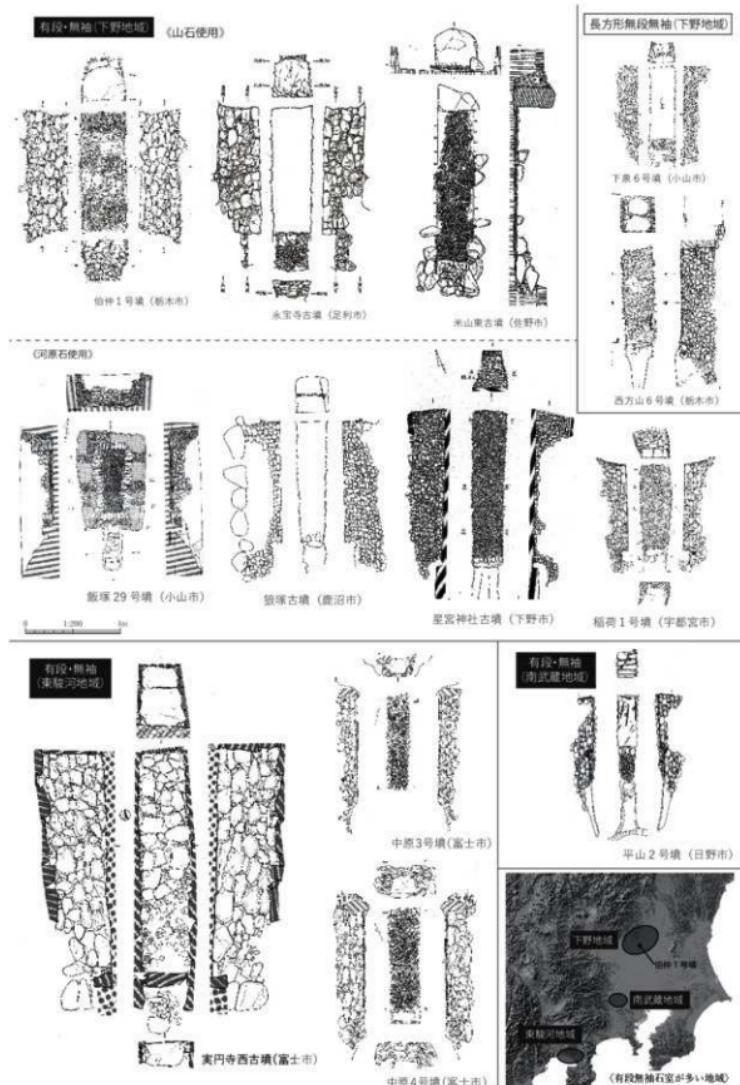
栃木市伯仲1号墳は、永野川西岸の低台地上に位置する復元長57mの前方後円墳である。埋葬施設は横穴式石室で、内部から多数の副葬品が出土した。埴輪や馬具、鉄鏃などの編年的位置から、6世紀後葉(TK43型式併行期)の造形が想定される(栃木県古墳勉強会2018・2019)。伯仲1号墳は当該期の首長墓と目され、その社会的・政治的位置付けが注目される。本稿では、主に6世紀後葉から7世紀前葉の横穴式石室を検討対象として、伯仲1号墳を中心とした下毛野南西部地域の社会関係を考えていきたい。

## 1 伯仲1号墳の横穴式石室をめぐる状況

### (1) 伯仲1号墳の横穴式石室とその類例

伯仲1号墳の横穴式石室は、玄室長5.0m、同幅1.8m、同高1.8mの無袖石室である。石材は山石を用い、チャートの割石や「岩舟石」を使用している。玄室平面形は長方形で、奥壁は大型の鏡石の上に小型の石材を用いる。玄門部は閉塞石の存在により明確になっていないが、無袖であることが確認できる。また、塊石

(1) 筑波大学大学院



第1図 伯仲1号墳の横穴式石室とその類例

による閉塞石が樋石上<sup>(1)</sup>になされていることが注目される。羨道から玄室へと一段下がる構造の無袖有段構造石室は、短い羨道部を充填するように段の部分で塊石を用いて閉塞することが多いので、伯仲1号墳も無袖有段構造石室である可能性が高い。

無袖有段構造石室（市橋 2010）は、平面形は無袖で、入口部に樋石を伴って段を有する一群である（第1図）。基本的に地下式で羨道部が短い。この一群は下毛野地域において多くみられ、「星の宮神社型」（小森・中村 1989）や「飯塚型」（大橋 1990）などと呼称される事例がこれにあたる。系譜関係としては、広くは「堅穴系横口式石室」の流れの中で位置づける見解がある（池上 1988）。また、これらの無袖有段構造石室は、基本的に河原石小口積みによるものであるが、山石を使用するものもあり（市橋 2010）、伯仲1号墳は後者として理解される。当該地域の無袖有段構造石室としては小山市飯塚 29号墳の横穴式石室が最も古く、6世紀前葉から中葉には導入されている。以降、飯塚古墳群を中心に展開し、周辺地域の石室へと影響を与える。

東日本に目を向けると、無袖有段構造石室は南武藏地域および東駿河地域に分布している（藤田 2016）。特に、富士山・愛鷹山麓の東駿河地域では、6世紀後半以降に首長墓から群集墳に至るまで無袖有段構造石室が採用される地域である。市橋一郎は、下毛野地域の山石を使用する無袖有段構造石室について、東駿河地域との関係性を示唆している（市橋 2010）。

一方で、伯仲1号墳の石室が無袖無段構造である可能性も残る。近辺の長方形玄室・無袖無段構造石室の事例をみると、小山市下泉 6号墳や折木市西方山 6号墳などが存在する。ただし、伯仲1号墳の石室と玄室平面形・玄室規模・石材・用石技法が共通する石室は意外と少ない。当該地域において無袖有段構造石室の多くが狭長な河原石積み石室であり、無袖無段構造石室も法量や規模の面で不一致である。後述するように、唯一、足利市永宝寺古墳の石室は平面形・玄室規模・石材・用石技法などが類似する。

このような状況の中で、伯仲1号墳の山石を用いた無袖石室が、下毛野南部地域に前段階から存在していた河原石積みの無袖有段構造石室に由来するのか、それとも東駿河地域など他地域との情報共有を想定するのかは、現状では判断しかねる。河原石積みの無袖有段構造石室や東駿河地域の石室と「他人の空似」である可能性を捨てきれない以上、伯仲1号墳の石室系譜を絞ることは得策でない。必ずしも石室の伝播や系譜の追求といった側面に終始するのではなく、むしろ地域内における石室の共通性や差異性に目を向けることで、その横穴式石室が採用されるに至った社会的状況を追及することができると考える。

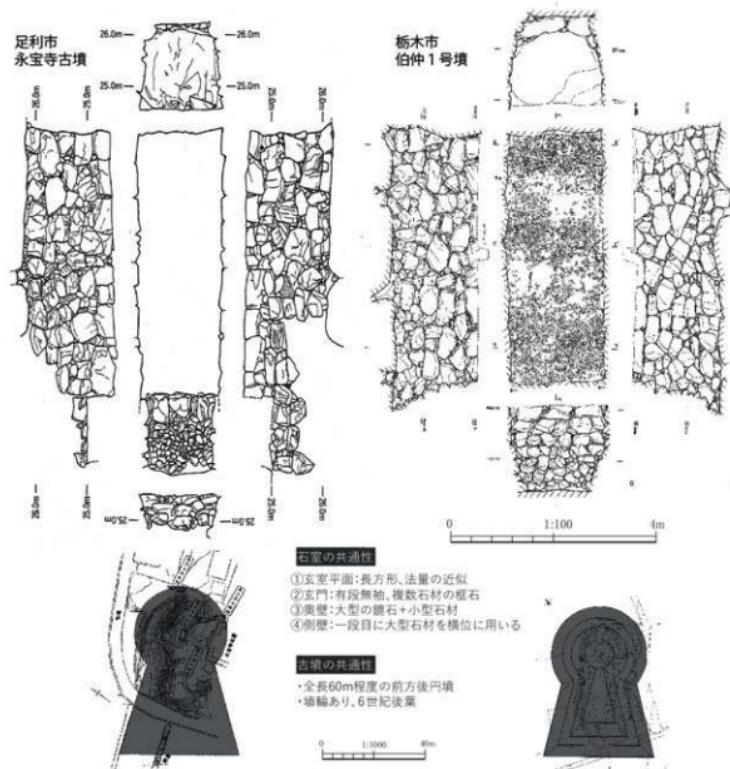
## （2）伯仲1号墳と永宝寺古墳の共通性

伯仲1号墳の横穴式石室は巨視的には無袖有段構造石室として位置付けられることを指摘したが、ここで注目したいのは、伯仲1号墳の横穴式石室が、足利市永宝寺古墳の石室と類似している点である（第2図）。永宝寺古墳は、渡良瀬川南岸に位置する全長 66m の前方後円墳である（足利市教育委員会 2004）。埴輪をもち、周溝からは須恵器大甕片も出土している。伯仲1号墳の石室と永宝寺古墳の石室を比較すると、以下の共通性が認められる。<sup>①</sup>玄室平面形は長方形で、胴張を呈さない直線的な形状である。また、玄室の法量も近似する。<sup>②</sup>玄門部は無袖で、樋石を有し、玄室に向かって一段下がる構造をしている。また、樋石は複数の石材を用いている。<sup>③</sup>奥壁は大型の鏡石を用い、その上部に小型の石材をかませている。<sup>④</sup>側壁では、一段目に比較的大型の石材を横位に用いている。また、持ち送りが比較的弱い。<sup>⑤</sup>石材はチャートを中心にして石室を用いている。

これらの要素の共通性は、想定される石室構築過程からも追認できる。伯仲1号墳では、石室の目地の検討から、奥壁を据える→側壁最下段および樋石を据える→奥壁鏡石の高さまで側壁を構築する→奥壁鏡石上

の石材を置き、それに合わせて残りの側壁を構築する、といった流れが想定されている。永宝寺古墳の横穴式石室も同様の石室構築過程を推測できる。このように、伯仲1号墳と永宝寺古墳の石室の類似は、イメージされた石室の空間形状（長方形玄室の無袖有段構造石室）と、それに至るまでの構築過程を同じくすることに起因していると言える。

興味深いのは、両者が埴丘規模と時期も近い点である。伯仲1号墳は復元全長57mの前方後円墳と想定され、永宝寺古墳は全長66mの前方後円墳である。両者ともに埴輪をもち、出土遺物の様相から6世紀後葉（TK43型式併行期）の築造が想定される。さらに、副葬品としては馬具や弓金具を有し、比較的上位の階層に位置付けられる。横穴式石室だけでなく、埴丘規模・築造時期・副葬品の内容が近しい点からは、両者が類似の社会的・階層的位置付けにあったと言える。



第2図 伯仲1号墳と永宝寺古墳の共通性

## 2 横穴式石室からみた伯仲1号墳の社会的位置付け

### (1) 伯仲1号墳と永野川流域の横穴式石室

次に、周辺地域、特に永野川流域の横穴式石室との関係性の中で、伯仲1号墳を位置付けてみたい。永野川・赤津川流域の古墳群は、北から順に「西方地域群」「皆川地域群」「大平地域群」の3つのまとまりで把握される（秋元2016）。横穴式石室の基本的な変化としては、平面形は長方形から胴張形へ、奥壁は小型石材を積み上げるものから鏡石を用いるものへという方向性がうかがえる（秋元2006）。大平地域群および皆川地域群では、奥壁は小型の石材を積み上げるもの先行するが、一定の大きさを積み上げるものと、鏡石を用いるものは必ずしも時期差ではないこと、天井石については石材の大型化とそれに伴う数の減少が認められることなどが指摘されている（小森2012）。これをふまえて、秋元陽光によってⅠ～Ⅲ段階が設定されている（秋元2016）。

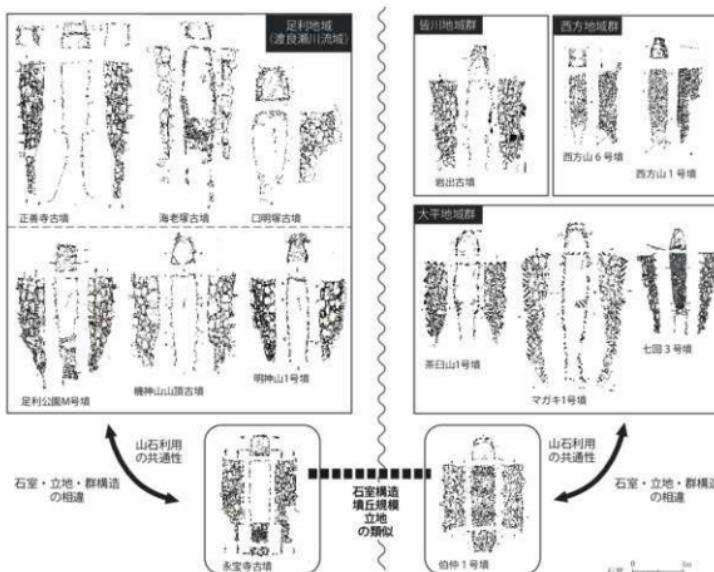
大平・皆川地域群における6世紀後半の横穴式石室（秋元によるⅡ段階）は、平面形態は多様であるが、いずれも長方形玄室である。玄室平面規模の大きい石室についてはいずれも有袖の石室であり、立柱石を伴う疑似両袖が頗著に認められる（マガキ1号墳・茶臼山1号墳・岩出古墳）。また、天井石から遊離する棺石がみられることも特徴的である。一方で、6世紀後半の無袖石室は狭長な無段無袖構造石室である（七廻2・3号墳）。墳丘規模と石室規模を鑑みれば、相対的には有袖（疑似袖）石室を上位に、無段無袖石室を下位に位置付けることができる。西方山地地域群の西方山古墳群では、基本的に無袖無段構造の石室で<sup>12</sup>、6世紀末葉から7世紀初頭に位置付けられる1号墳や3号墳は胴張り化の傾向がうかがえる。

このようにみたとき、伯仲1号墳の無袖有段構造石室が、当該地域の横穴式石室の系統の中に必ずしも乗ってこないことがわかる（第3図）。立柱石を伴う疑似袖の横穴式石室と、無袖有段構造石室は空間形状として異質であり、同じ永野川流域にありながら、その基本的な形態が異なっている。また、七廻2・3号墳や西方山古墳群の無段無袖石室とは、法量・平面形・石材などの点がそれぞれ異なり、こちらも伯仲1号墳との密接な関係を見出しがたい。

これは古墳の立地の側面からも追認できる。すなわち、伯仲1号墳は太平地域群とは直線距離で約6km、皆川地域群とは約10km離れており、同じ永野川流域であるが、同一の地域群として括ることがためらわれる。また、大平地域群では小荷田古墳群や白岩古墳群、皆川地域群では岩出古墳群や愛宕山古墳群などの群集墳が認められる一方で（秋元2016）、伯仲1号墳は明確な群集墳を伴わず、単独墳的な立地となっている。このように、石室構造・立地・群構造の相違などから、太平地域群や皆川地域群とは異なる位置付けを模索する必要がある。

### (2) 足利地域との比較検討

統いて、足利地域における永宝寺古墳の位置付けを考える。足利地域では渡良瀬川北岸の常見古墳群で首長墓が展開し、6世紀後半から7世紀初頭の間に、両袖で平面長方形の正善寺古墳（前方後円墳・103m）から、無袖で胴張形の海老塚古墳（円墳・50m）、さらに両袖で胴張形の口明塚古墳（円墳・47m）への変遷が指摘されている（市橋2014など）。小型古墳の様相は複雑であるが、両袖で長方形玄室のものとしては小首長墓で足利公園M号墳、小型古墳で行基平1号墳などがあり、無袖で緩やかな胴張形を呈するものとしては小首長墓で機神山山頂古墳、小型古墳で明神山1号墳などがある。足利地域では6世紀後葉の比較的早い段階から胴張形が採用されていることも指摘されているが（齋藤・中村1992）、栃木県域全体の傾向で捉えれば、おおむね6世紀末葉以降に胴張り化の傾向が見て取れ（中村2003など）、大枠ではその例に漏れない。



第3図 伯仲1号墳と永宝寺古墳をめぐる諸関係

さて、足利地域では両袖石室や胴張形を呈する無袖石室などが主体となる様相がうかがえるが、無袖有段構造の永宝寺古墳はやや異質である。首長墓の正善寺古墳や海老塚古墳とは、その様相が大きく異なっていることがわかる。

さらに、立地や階層構造の相違もみられる。渡良瀬川流域には古墳が密集しているが、永宝寺古墳はこの地域とは約4.8km離れている。渡良瀬川流域では首長墓群である常見古墳群や、群集墳である足利公園古墳群、明神山古墳群・機神山古墳群・八幡山古墳群などが展開し、重層的な社会構造を見せており、永宝寺古墳の周囲には大規模な群集墳や後続する首長墓などが見当たらず、独立墳的な状況を呈している。このように、永宝寺古墳は、石室構造・立地・群構造の相違などから、渡良瀬川流域とは異なる社会的位置にあったものと思われる（第3図）。

このような視点で見たとき、足利地域における永宝寺古墳の位置付けと、永野川流域における伯仲1号墳の位置付けが構造的に類似していることに気づく（第3図）。永宝寺古墳と伯仲1号墳は、いずれも主たる古墳の密集域から外れて独立墳的な様相を呈し、横穴式石室の構造もそれぞれの地域群のものと異なっていた。この両者の横穴式石室が極めて類似し、階層的にも同様に位置付けられるのであるから、ここに共通した社会構造を指摘できよう<sup>⑨</sup>。

ただし、伯仲1号墳も永宝寺古墳も足尾山塊の山石を使用していることから、前者は大平・皆川地域と、後者は渡良瀬川流域と無関係ではない。伯仲1号墳は、大平・皆川地域と関係をもちつつもそれとは異なる社会・政治組織であり、かつ足利地域における永宝寺古墳と同様のポジションにあったと想定できる。

## おわりに

伯仲1号墳の横穴式石室の位置付けとして、①巨視的には無袖有段構造石室の可能性が高いこと、②伯仲1号墳と永宝寺古墳と横穴式石室の構造が共通し、同じ社会的・階層的位置付けが想定されることを指摘した。統いて地域内部の横穴式石室の比較から、③伯仲1号墳の石室は、大平地域群や皆川地域群とは横穴式石室や立地の様相を異にすること、④永宝寺古墳もまた渡良瀬川北岸域の古墳と石室や立地の様相を違えることを指摘した。以上の検討から、伯仲1号墳と永宝寺古墳の被葬者が、極めて緊密な情報共有をおこなっていたこと、6世紀後葉における同一の社会的役割を担っていたことなどを推察した。

今後の課題としては、まず、その具体的な社会関係について検討が及ばなかった点が挙げられる。予察的に述べるのであれば、伯仲1号墳と永宝寺古墳はいずれも渡良瀬川を中心とした低地面を意識している。また、両者の北側にはのちの東山道が通る立地も共通する。これらの立地からは、内水面交通と陸上交通の結節点としての役割が想定され、そのような交通体系のもたらす緊密な情報共有システムが、類似した横穴式石室を構築する背景になったのかもしれない<sup>⑩</sup>。また、本稿では周辺地域の多くの石室についてはその位置づけが不明瞭なままとなつた。特に、永宝寺古墳と足利市文選11号墳（無袖有段構造石室）や、伯仲1号墳と飯塚古墳群および牧ノ内古墳群（無袖有段構造石室主体）などとの関係性については、今後の課題である。

本稿をなすにあたり、栃木県古墳勉強会の方々からご教示いただき、とくに秋元陽光氏からご意見を賜りました。末筆ながらお礼申し上げます。

## 【註】

(1) 「瓶石」は玄門部における段構造をもつ場合に、「胴石」は段構造をもたない場合において使用する。

- (2) 西方山4号墳は無袖有段構造の可能性がある。ただし、河原石の小口積みで構築されていること、奥壁が複数段で構成されていることなどから、伯仲1号墳との直接的な関係は見出しにくい。
- (3) また、伯仲1号墳に隣接して山王寺大槻塚古墳が、永宝寺古墳に隣接して小曾根浅間山古墳が立地している。両者は、既存の古墳（前期古墳）を意識して造墓されている点においても共通性が認められる。
- (4) 伯仲1号墳と永宝寺古墳はいずれも馬具が出土している。馬具は軍事的側面が強調されることが多いが、律令期の駅伝制を鑑みれば、馬の保有は交通体系の整備に深く関係している（松尾2006）。なお、伯仲1号墳がのちの寒川郡域に近く、永宝寺古墳が栗田郡域に近いことがわかるが、いずれも小郡で、やや特異な立派の契機が想定される。これらに関係性については今後検討していただきたい。

#### 【参考文献】

- 秋元陽光 2006 「西方山古墳群における横穴式石室」『栃木・西方山古墳群』 駒沢大学考古学研究室
- 秋元陽光 2016 「栃木県赤津川・永野川流域の古墳群」『群集墳展開の共通性と地域性—王權・地域首長と群集墳被葬者—』 東北・関東前方後円墳研究会
- 足利市教育委員会 2004 「永宝寺古墳第2次発掘調査」『平成14年度文化財保護年報』
- 池上 悟 1988 「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第88号 立正大学文学部
- 市橋一郎 2010 「下野」土生田純之編『東日本の無袖横穴式石室』 雄山閣
- 市橋一郎 2014 「北関東の横穴式石室」 同成社
- 大橋泰夫 1990 「下野における古墳時代後期の動向—横穴式石室の分析を通して—」『古代』第89号 早稲田大学考古学会
- 小森哲也 2012 「7.まとめ 栃木市岩出古墳測量調査報告」『栃木県考古学会誌』第33集 栃木県考古学会
- 小森哲也・中村享史 1989 「栃木県における横穴式石室の受容」『東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所・北武藏古代文化研究会
- 斎藤 弘・中村享史 1992 「足利市機神山古墳群の形成過程について」『研究紀要』第1号 （財）栃木県文化振興事業団理蔵文化財センター
- 栃木県古墳勉強会 2018 「栃木市伯仲1号墳（長山古墳）調査報告1」『栃木県考古学会誌』第39集 栃木県考古学会
- 栃木県古墳勉強会 2019 「栃木市伯仲1号墳（長山古墳）調査報告2」『栃木県考古学会誌』第40集 栃木県考古学会
- 中村享史 2003 「栃木県における後期古墳の諸段階」『後期古墳の諸段階』 東北・関東前方後円墳研究会
- 藤村 翔 2016 「中原4号墳の横穴式石室とその歴史的意義」『伝法中原古墳群』 富士市教育委員会
- 松尾昌彦 2008 「古代東国地域史論」 雄山閣
- 紙幅の都合上、石室の報告書は割愛した。

# 永野川流域の古墳時代大刀と馬具 —栃木市伯仲1号墳とその周辺地域を考える—

うち やま とし ゆき  
内山 敏行

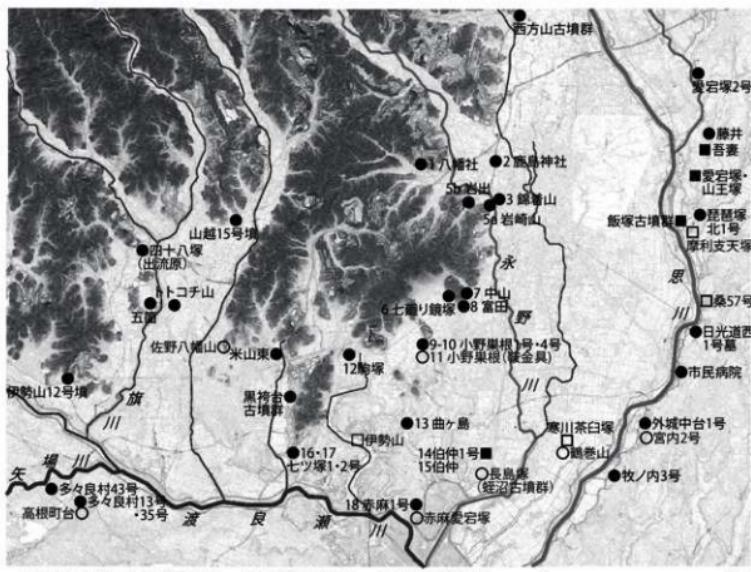
はじめに

1 永野川流域の古墳時代馬具

2 永野川流域の古墳時代装飾大刀

3 装飾付武器・馬具出土古墳と古墳時代後期

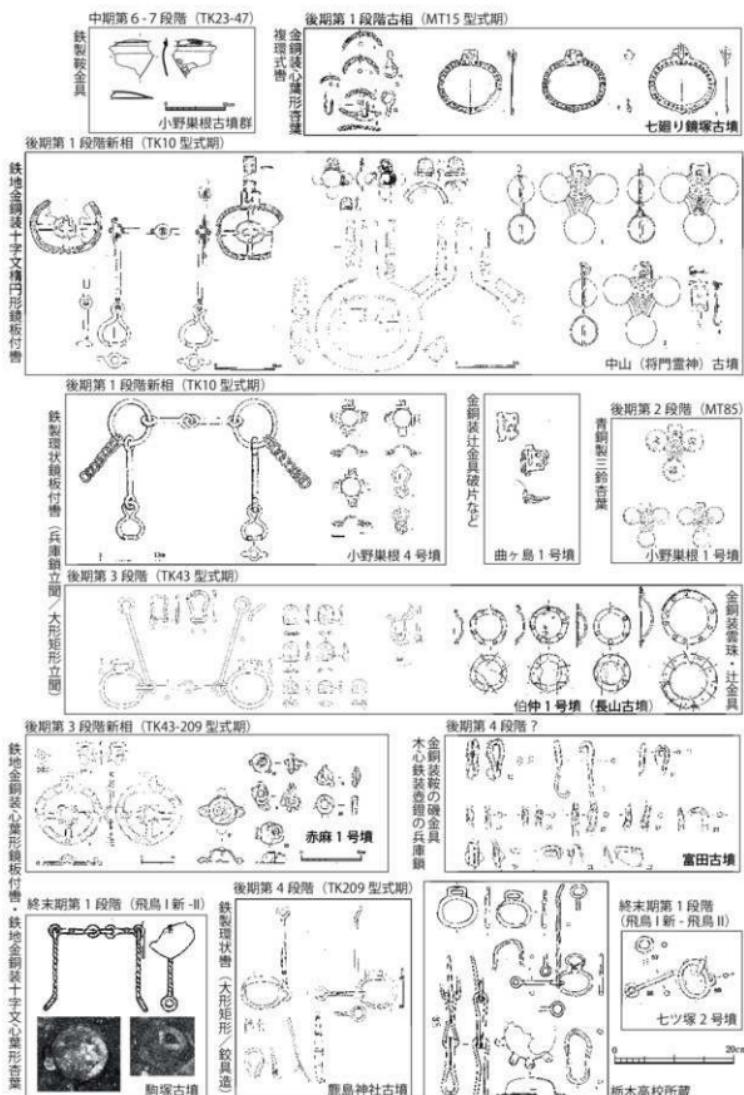
栃木県域南西部の永野川流域周辺に装飾大刀や馬具が多い。古墳後期前・中葉に三鈴杏葉や大加那系装飾馬具・大刀が出土する。後期後葉には、径20mの赤麻1号墳の金網装飾・主頭大刀が、この地域最大の後期前方後円墳である伯仲1号墳の鉄製轡・鉄製円頭大刀より優位にみえる。後期末～終末期は富田古墳の装飾大刀や胸締古墳の装飾馬具が最上位である。後期後葉には群集墳の頂点をなす地位以上が継承した装飾大刀が、後期末葉から群小墳に波及して地位や家格を表示しているのか不明瞭になる。丘陵に多い後期群小墳から離れた平地に後期有力墳を造る理由として、中期古墳の立地を繼承したことと推定する。



第1図 永野川流域をとりまく地域の馬具・装飾大刀出土古墳および中期古墳

第1表 永野川流域および隣接地域の馬具・装飾大刀出土事例

No	所在	古墳名	墳形	規模 (m)	時期	主体部	馬具	装飾大刀・武器ほか	文献
1	福井市	八幡社	円	径 19m		横穴式石室	「馬具」	铁振・土师器・轆轤	福井市教委 1990, p.105
2	福井市	荒島神社	不明	不明	TK209	横穴式石室	大型矩形立闇室櫛襷1・鉄地 金網張飾金具片1・鎧兜金具 1・鎧車軸片1	金網製頭柄頭1・直刀2・鉄 襷1・鉄鎧10以上・耳環2	6世紀・大橋 1988
3	福井市	越着山	不明	不明			「金網製鉢1・金網製鉢1」	金網鞘金具(魚々子文)破片 3	東博1980, p.120
4	福井市	福井高校付 隣	不明	不明	TK209-飛鳥I	大型矩形立闇室櫛襷1・鉄具 造立闇室櫛襷1・鎧車軸片1 鐵製雲珠1・鉄具1	金網鞘金具(魚々子文)破片 1・頭柄頭1・刀長頭頭邊1	元・舟藤 1982	
5	福井市	旧御川村岩崎 (岩崎山古墳群 古墳たは 岩出古墳群)	不明	不明	飛鳥II	不明		金網反龍頭頭柄頭(旧御川村 中學校旧蔵・所在不明)	舟藤1928, 福 木県古墳勉 強会2012
6	福井市	七郷の塚原	円	28.4m	MT15	木棺床上 に木棺2	(舟形木棺)復原武具1・達金 具残片? (箱形木棺)金網裝 心葉形杏葉3	(舟形木棺)鉄刀1・鉢身+右 突各1・刀2・平根鉄鏃14・縦 根鉄鏃4・縦矢6・エンド板2・ 革縫・竹編2・棒状木製品2・凸 形状木製品・箆状竹製品・革 製品 (箱形木棺) 鉄刀1・金 網製三輪3B・毛製品	大平町教委 1974, pp.70- 71
7	福井市	中山(得門塗)	円	18m	TK10	横穴式石室	金網裝横円形十字鍍板帶 1・木心歎板張輪1・對三鉢 合葉3・鉄具1・金網裝辻金 具2・鉄製環狀雲珠1	铁刀3・範表袋刀子1・铁藏13 以上	福井県古墳 勉強会2004, 2005
8	福井市	富田	不明	不明	TK43-209	横穴式石室(推定)	鉄地金網張鞍轡金具片1・ 鎧車軸破片・鎧兜金具破片	頭裝主頭羽根頭1・鉄地頭 襷・柄巻銀錠1・鹿頭?の金網 製裝具(ぬ出頭/縦/單脚足金 物・新輪板)	竹澤2014 pp.29-37
9	福井市	小野鬼掛1号	円	16- 20m	MT85	横穴式石室	鉄製轡1・三鈴杏葉3	鉄地銀張1上円下方環頭大 刀1・鉄藏約70・刀子2・埴輪	前澤1955b, 若井町1988, 小森哲也 1989, 小森記 他1989, 金字 大2017
10	福井市	小野鬼掛4号	円	20m	TK10	横穴式石室	兵庫頭通結果櫛襷1・鉄製辻 金具3・鉄具2	鉄刀6・鉄藏156・刀子4(圓角 角含む)・ヤガガナ1・埴輪	若井町教委 1988
11	福井市	小野鬼掛古 墳群出土	不明	不明	TK23-47	不明	鉄製鞍金具破片(福井市教委所 蔵, 図は内山2017)	新留短甲破片(福井市教委所 蔵)	内山2017
12	福井市	祠塚	円	54m	TK209 (馬具 飛鳥I)	横穴式石室	大型矩形立闇室櫛襷1・心葉 形鍍板帶1・鉄地金網十字 心葉形杏葉1・鉄具	铁刀11片(5握以上、八咫鏡1 無志諱1)・鉄鏃	福井県教委 1981, pp.21- 29
13	福井市	曲ヶ島1号	円	25- 26m	TK10- M785?	横穴式石室	金網裝辻金具片1・金網裝辻 金具片2!	铁刀2(無志諱付1)・刀子1・鉄 藏1片	前澤1973, pp.7-8
14	福井市	長山(伯仲) 号境	前方 後円	復原 60m	TK43	横穴式石室	大型矩形立闇室櫛襷1・金網 無志無脚珠1・金網裝無脚辻 金具3・鉄製鉢2・鉄轡10- 金網裝帯端金具7	横円頭柄頭1/輪原1・直刀2、 無志鐵3・赤黃金具1・鉄鏃 銅口金具1・広根鏃(短2/2 有頭2/2)・テラ開槽23・長頭 鏃10・反刃7・兩刃16・弓 兩頭金具8・鉄装ユカリ・鍵1・刀 子7・鎖1・頭1・棒状鉄製品・金 網冠1・鉄耳環4・メタウ勾玉9、 土玉5・ガラス小玉59・円鏡1/ 人物・形象器物	福井県古墳 勉強会2018, 2019
15	福井市	伯仲古墳群	不明	不明				頭裝大刀(原物1件所在不明) 「故佐田崩之助氏所蔵 大久 保右次氏」教示	小森1986
16	福井市	七ツ塚1号	円	不明	TK209- 飛鳥II	横穴式石室		鉄地頭象頭1・頭柄頭1・長頭 襷(片刃)	曾田祐1972, 折原2020
17	福井市	七ツ塚2号	円	12m	飛鳥II	横穴式石室	大型矩形立闇室櫛襷1	無志頭柄1・頭裝黃金具1・鉄 襷2片・刀子3・金網耳環3・頭 轡1对・頭裝器片	曾田祐1972, pp.56, 67; 折 原2020
18	福井市	赤麻1号	円	20m	TK43- 209	横穴式石室	金網裝十字透心葉形鍍板 1・衝および引手破片・辻金具 2・金網雲珠被片2	金網主頭柄頭(所在不明)・鉄 地頭象頭1・頭柄頭1・無志頭 金網冠1・金網耳環2・水晶切子玉1・ 碧玉管3・円筒埴輪	高橋1917・藤 岡町1985・藤 岡町2003



第2図 栃木県栃木市永野川流域周辺地域の古墳時代馬具

## はじめに

栃木県南西部の永野川流域にある栃木市大平町伯仲1号墳（長山古墳）は、推定墳長60m以上と考えられ、栃木・三毳・安蘇地域——思川から旗川までの間——で最大の後期前方後円墳である（栃木県古墳勉強会2018・2019）。西に連続する蓮花川流域で、同じ古墳後期後葉に栃木市岩舟町甲塚古墳（墳径78m）、後期末に胸塚古墳（墳径53m）のような大型円墳が築造されている。

ここでは、永野川流域の古墳時代馬具と装飾大刀を検討する。この地域には多種類の装飾大刀が多い（栃木県古墳勉強会2012,p.50）。芳賀郡益子周辺（小森1991,p.179; 黒崎・小森2014,p.103）や足利周辺とともに、下毛野では装飾大刀の集中域である。馬具の出土数も多い。永野川流域とその隣接地域（第1図1-18）で出土した古墳時代馬具と装飾大刀を第1表、実測図がある馬具を第2図、装飾大刀を第5図に示す。

古墳時代後期前葉から中葉に三鈴杏葉と大加耶系装飾馬具・大刀がもたらされる／後期後葉に径20mの赤麻1号墳の金銅装轡・主頭が長60mの伯仲1号墳の鉄製轡・円頭よりも優位にみえる／後期末～終末期に富田古墳の大刀2振や胸塚古墳の心葉形馬具が最上位であることに注目する。後期後葉には群集墳の頂点をなす地位以上が副葬していた装飾大刀が、後期末葉から群小墳に波及するので、高い家格や地位を示すのが不明確になる。丘陵に多い後期群小墳から離れた平地に後期有力墳を造る理由として、中期古墳の立地を継承したことを見定す。

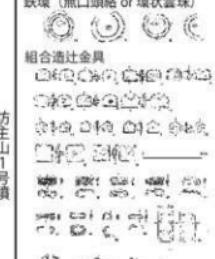
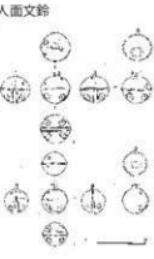
## 1 永野川流域の古墳時代馬具

〔古墳時代中期後半〕 永野川流域で最古の馬具は、栃木市岩舟町小野巣根古墳群の鉄製鞍金具破片である（第2図左上）。一緒に保管されている大型鋲の横矧板銀留短甲破片からみて古墳中期後葉か末葉になる。古墳中期の鉄製鞍金具は中期中葉の初期馬具（大阪鞍塚、滋賀新聞1号、奈良ベンショ塚、岐阜県中八幡）から杏葉を伴う段階（大阪御獅子塚、宮崎県下北方5号）を経て、釘間隔が広くなる中期末葉（福岡塚堂古墳）まで少數ずつ認められる。小野巣根の鞍の海金具は古い時期に多いが、現存破片に孔がなくて釘間が広いと見られる点が新しい。

小野巣根古墳群で鞍金具と短甲を出土した古墳は、希少な中期の馬具に加えて短甲または小札甲を副葬する足利市助戸十二天・宇都宮市雀宮牛塚・真岡市大和田富士山古墳と同じ階層と考えることができる。この3基は、墳長30～50m級の前方後円墳か帆立貝形古墳である。栃木県域の馬具副葬古墳は約120基で、関東では群馬県に次いで多い。しかし中期の馬具は他に6例だけで（下久亀塚・松の塚・磯岡北2号・十三塚6号住・岩舟台・酢屋5号）、馬利用が始まるころの状況を示す。墳長69mの下久亀塚は馬具（杏葉）の詳細が不明で、栃木県域では中期の大型古墳の副葬品がほとんどわからない。ほかの馬具出土中期古墳は墳長50m級以下のもの・小規模墳である。

中期の中規模円墳群とみられる栃木市藤岡町蛭沼古墳群の中に、甲冑を出土した（遺物は水害で失われた）という中期末～後期前半頃の径25mの円墳である長島塚古墳が、伯仲1号墳の南970mにある（藤岡町史2003,p.256）。隣接地域の中期古墳は、南西に栃木市赤麻愛宕塚・愛宕塚南古墳（飯田・秋元2003）、西に接する蓮花川流域で伊勢山古墳（藤岡町1985,p.52; 藤岡町史2003,pp.273-275）、東側に小山市寒川古墳群の鶴巻山・茶臼塚古墳がある（第1図）。

〔古墳時代後期前葉～中葉〕 栃木市大平町七郷り鏡塚古墳の組み合わせ箱形木棺と、京都府宇治市坊主山1号墳中央棺の金銅装心葉形杏葉は、後期前半（MT15-TK10型式並行期）の大加耶系の心葉形杏葉として、数少ない事例である（奈良大学2020,第3図）。後期前半の後の鏡板と杏葉は心葉形ではなく楕円形である。心

	面繫（轡・辻金具・力具）	尻繫（杏葉・鉤状吊金具）・鞍・鎧	音響具（鈴）
七廻り鏡塚古墳	 舟形木棺出土 複環式轡	 組み合せ木棺出土 鉄地金銅張心葉形杏葉	大平町教育委員会 (大和久震平編) 1974 『七廻り鏡塚古墳』, p.70 奈良大学文部省文化財学 科「唐山古墳群出土品報 告書」, pp.27-29
坊主山1号墳	 鉄環（無口頭絡 or 環状雲珠） 組合造辻金具  1号墳棺外北側	 鐵地金銅張心葉形杏葉 木心铁装鎧金具 鞍の縁金具? 1号墳棺外北側	人面文鈴  1号墳棺外南側

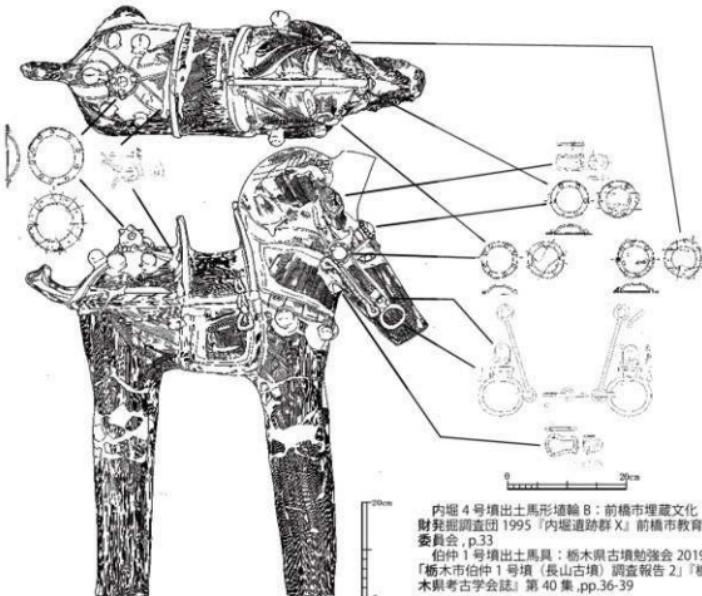
第3図 栃木県栃木市七廻り鏡塚古墳と京都府宇治市坊主山1号墳の馬具

葉形の外形は新羅の馬具に由来するが、七廻り鏡塚と坊主山1号の杏葉は鉤状吊金具を使う（新羅の帯状吊金具ではない）ので、大加耶系の製品である。大加耶圏では玉田M6号墳・池山洞45号墳に6世紀前半の心葉形杏葉があり（千賀1996）、七廻り鏡塚の杏葉も大加耶製の可能性がある（内山2011b, p.142）。

七廻り鏡塚古墳は、一組の馬具の面繫と尻繫を分けて副葬する事例で、複環式轡が埋葬用の舟形木棺にあり、杏葉3点は副葬品用の箱形木棺に納めている。坊主山1号墳中央棺では鈴2点だけが他の馬具から離れて木棺の南外で鉄鐸と一緒に出土している。これらは馬具の一部部品を外して儀礼的に使う事例であろう（宮代2016）。音が鳴る部品を馬具から外す状況は、岡山県正崎2号墳の環鈴を他の馬具から離して「さいごのお別れ」儀礼に使うのがわかりやすい事例である（山陽町2004）。坊主山1号墳の鈴2点も、大加耶を中心としてその東に接する釜山地域まで分布する「人面文鈴」である（趙晟元2019, p.79）。「目玉鈴」とも呼ばれる。この鈴も、坊主山の心葉形杏葉を大加耶系の製品と考える傍証になる。

複環式轡を検討した大谷宏治は、七廻り鏡塚古墳の轡をA1類に分類して、A1類の多くを日本製、A2類を朝鮮半島製品と考えた。「A類の個別属性は韓半島の加耶圏（特に高靈、陥川、昌寧）で確認できるが、……（中略）……韓半島からの渡来工人の関与は必要であるが、最初期の東塚古墳例を除いて日本列島産の可能性が高い」と述べている（大谷2021, p.441）。大谷がA1類を日本製と考える理由に挙げた諸点（「人」字形接合、鉤状吊金具の鉄配置、兵庫鎖）をいずれも確認できない七廻り鏡塚の轡は、後製か加耶製なのか決め手を欠くといふべきであろう。

後期前葉の栃木市大平町中山（将門靈神）古墳と、後期中葉の小野果根1号墳では三鈴杏葉がある。小野果根1号墳の轡は残りが悪く詳細不明である。中山古墳の十字文梢円形鏡板付轡は、西日本では三葉文梢円形杏葉とセットになるが、東日本とくに北関東西部の栃木県域では金銅装三葉文梢円形杏葉を青銅製鈴杏葉に置換した組み合わせが供給される（内山2011a, p.64）。金銅装梢円形鏡板付轡で階層（後全域で共通する社会的地位）を示すとともに、鈴杏葉によって役割（東日本出身者が多く受け持つ職掌など）を音で示す馬



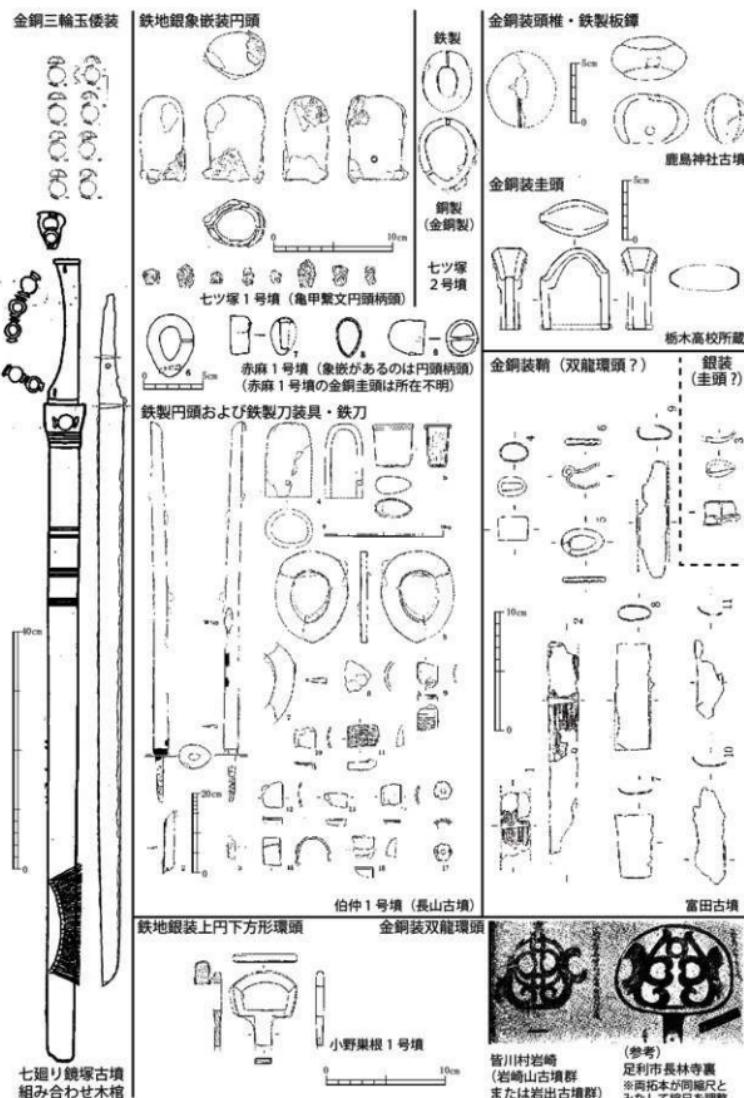
第4図 栃木県栃木市伯仲1号墳出土馬具と群馬県前橋市内堀4号墳出土馬形埴輪の馬装

装である。鉢古葉に置き換えられるために三葉文梢円形杏葉は関東地方では少ないので、埼玉県行田市北大竹遺跡で近畿製の鉄鍔・須恵器・單鳳環頭とともに出土している点が興味深い。(埼玉埋文 2022)。

**(古墳時代後期後葉)** 群馬県内堀遺跡群4号墳の馬形埴輪B(前橋市 1995, 第4図左)で、伯仲1号墳と同種の面繫を丁寧に表現している。裏面で革帶が交差している伯仲1号墳の金銅張無脚辻金具2点は、面繫の左右の交点に使う。残る1点の無脚辻金具は面繫の中央に使うもので、裏面で横方向の革帶が通り、直交する帯は辻金具にあわせて丸く切断し上下に伸びない。伯仲1号墳の金銅張無脚雲珠は7方向に革帶を延ばすもので、尻繫の中央に使う。鉄製シオデがあるので、木製鞍も副葬していたことがわかる。鎧は副葬しなかつたのか、木製壺鎧を革帶でつるすようなすべて有機質の鎧があったのか、または乱掘で失われたのか、はつきりしない。

こはゼ形3筋の金銅張帯端金具4点のうち2点で、襷の立間に面繫を留める(宮代 1997, pp.55-56)。さらに2点は(内堀4号墳の埴輪では表現されていないが)、鋲具の根元に面繫を固定する用途を考えられる。残りの帯端金具3点は面繫や尻繫のどこに使うのかよくわからない。金銅張帯端金具で立間や鋲具に繫を固定する使い方は、伯仲1号墳より一段階古いTK10型式期の宮崎県えびの市島内139号地下式横穴墓でよくわかる(えびの市 2021, pp.26,39)。大型矩形立間環状鏡板付襷の面繫に無脚辻金具を使う伯仲1号墳・内堀4号墳と同様の馬装を島内139号墓でも推定できると思われるが、無脚辻金具3個と無脚雲珠1個を尻繫に使う可能性も検討されている(肥田 2021, p.48)。

推定墳長60mの伯仲1号墳よりも、墳径20mの赤麻1号墳の金銅装鏡板襷(第2図左下)・金銅装主頭大刀・



第5図 栃木県栃木市永野川流域周辺地域の装飾大刀

象嵌装円頭大刀（第5図中上）のほうが装飾性は高い。時期が接近している両古墳で、埴丘規模と馬装にみられる上下関係が逆転してみえる。伯仲1号墳の馬具が床面上層の（=独立した古墳を造営しなかった追葬者の）副葬品であることが関係するのであろうか。伯仲1号墳の馬装は、鉄製轡で馬を速く走らせる実用性と、金銅装の辻金具・雲珠・帶端金具による装飾性を兼ね備えている。また、伯仲1号墳の円頭大刀は金銅装ではなく簡素な鉄装である。赤麻1号墳のような十字文透心葉形鏡板轡は、地域最有力墳に次ぐ階層の古墳で出土することが多い。（大谷 2020,p.12）。

〔古墳時代後期末葉～終末期初頭〕 水野川流域では栃木市大平町富田古墳が金銅装馬具を持つ。兵庫鎖のほかに鉄地金銅張の鞍金具破片が表面採集されている（第2図富田古墳の右下、竹澤 2014）。銀線巻柄大刀と金銅装大刀の破片（第5図右）からみて後期末葉前後であろう。

西に続く蓮花川流域では、金銅装杏葉を持つ栃木市岩舟町駒塚古墳の馬具が最上位である（第2図左下）。心葉形鏡板付轡も、心葉形の鉄製地板の上に金銅張の飾り板を推定することが妥当である。ただし、駒塚の杏葉と大型矩形立間造環状鏡板付轡は所在不明で、実測図も報告されていない。甲塚西遺跡の報告書の写真（栃木県教委 1981, PL12 下段左）にある卷尺の目盛から、2枚の金銅装十字文心葉形杏葉の横幅は約8cmと9cmである（第2図左下写真）。立間に2枚で繋を直接留めるもので、終末期第1段階・飛鳥I新相並行期・7世紀前葉から第二四半期頃に相当する。胸張がない細長方形の駒塚古墳の横穴式石室は、伯仲1号墳のすぐ後で古墳後期末葉とみられ、金銅装心葉形装飾馬具は追葬品と考えることになる。

後期後半以後、環状鏡板付轡の大半が大型矩形立間造と鉢具造になるので、「畿内系」の轡（宮代 2015・田中 2015・大谷 2022）が主に供給・使用されたといえる。この状況は、東日本で馬具出土古墳が最も集中分布する長野・静岡・群馬・栃木県域で広く共通する。環状鏡板は栃木高校所蔵品で鏡板高70mmと62mm（大型矩形立間）および70mm（鉢具立間）、鹿島神社古墳で鏡板復原高68mm、七ツ塚2号墳が鏡板高64mmで、小形のものが新しい。

## 2 水野川流域の古墳時代装飾大刀

〔古墳時代後期前葉～中葉〕 後期前葉・中葉は金属装の装飾大刀が盛んに作られるよりも前で、倭装大刀と舶載装飾大刀がみられる。倭装大刀は栃木市七廻り鏡塚古墳に金銅製三輪玉装飾大刀がある（第5図左）。馬具でも触れた京都府坊主山1号墳と七廻り鏡塚古墳は、三輪玉倭装大刀や鉢などの武器でも類似点が多い。

小野果根1号墳の鉄地銀張り上円下方形環頭大刀は（第5図下）、大加耶から撤入された「素環III群」と考えられている（金子大 2017, pp.273-274）。そうであれば、製作年代は大加耶が新羅に併合される562年以前であろう。小野果根1号墳への副葬年代は、竪穴式石室を持つことと後期第2段階の鈴杏葉を伴うこと



第6図 上円下方形環頭大刀と変形三葉文環頭大刀の事例

からみて MT85 段階並行期、6 世紀第三四半期になる。小野果根 1 号墳の他には、岡山県で瀬戸内市金鳥塚古墳に銀装の素環 III 群、TK43 型式期の倉敷市王墓山古墳に金銅装の上円下方形環頭がある（第 6 図）。これと同じく古墳後期の後で主流にならない外来系環頭大刀の一種として、MT85 段階の埼玉県将軍山古墳にある大加那の龍鳳 III 4 群環頭大刀（金字大 2017, pp.218,279）と同種の変形三葉文環頭が、岡山市の旧御津郡建部村でも出土している（濱田他 1923, p.108）。北関東西部と岡山県域で MT85-TK43 期に大加那の装

## 第2表 後期古墳の階層・副葬品と装飾大刀

刀の種類をある程度推定できる倉木城の事例を集計

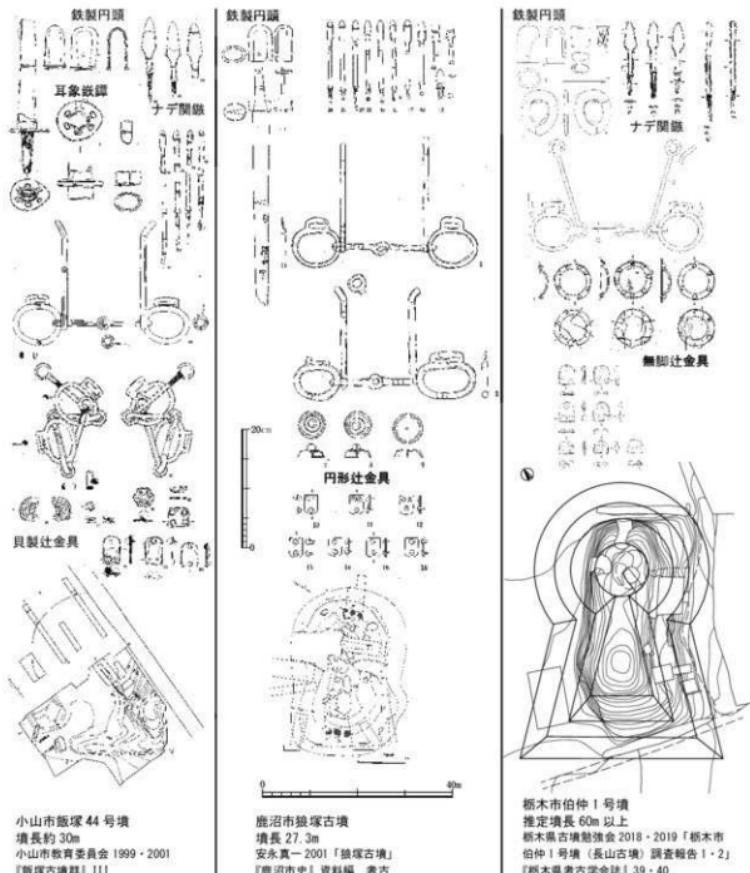
A) 最有力首長墳（長径60m以上）の装飾大刀							刀の種類をある程度推定できる倉木城の事例を集計	
	施主	陪葬品	馬 具	副 銅 頭	唐 潤 大 刀	安 潤 大 刀	嵯 風 安 潤 大 刀	時 期
丹生	船方地円228m 円28.4m 例付?	△ (歩)	甲 金銅頭	圓	金銅装金頭+切端削	金銅装金頭	嵯風装金頭	43
六條塙塚	船方地円270m 船方地円270m	△ (歩)	中甲 金銅頭	圓	金銅装円頭	金銅装円頭	嵯風装円頭	43
伊勢1号(船山)	船方地円560m 円20m	△ (歩)	金銅頭	鞍 頭	金銅装	金銅装	嵯風装	43
(横欄) 内河、苔輪・伏仲(2都賀須)							最有力首長墳の跡大刀は長瀬(→後瀬江長径400m以下)。円頭は伏仲だけ秋葉。	
B) 長径30~60mまたは金銅装馬具/銅鏡等を伴う有力墳の装飾大刀								
(都賀の永野川流域周辺)	施主	陪葬品	馬 具	副 銅 頭	唐 潤 大 刀	安 潤 大 刀	嵯 風 安 潤 大 刀	時 期
上瀬川後堤	円28.4m 例付?	△ (歩)	金銅古 戴頭	圓	金銅装反曲刀	金銅装反曲刀	嵯風装反曲刀	43
高山	6.9m	○	金銅頭	鞍 頭	金銅装反曲刀	金銅装反曲刀	嵯風装反曲刀	43~209
高島神社	不明(前方後円?)	○		鞍 頭				未収
吉瀬1号	円20m	○	金銅帶	跳 口				未収
吉瀬高校所蔵	6.9m		鞍 頭	○	金銅装	金銅装	嵯風装	43~209
(都賀都)							都賀都	
猪塚	船方後円27.3m	△ (歩)	鞍 頭	圓	金銅頭	金銅頭	嵯風装金頭	43
西山6号	船方後円33m	○	鞍 頭		金銅頭	金銅頭	嵯風装金頭	43
別の宮神社	円74.6m	○	金銅装	圓			嵯風装	43
都賀44号	船方後円30m	○	金銅帶	鞍 頭	金銅装	金銅装	嵯風装	43
(安藤都)							安藤都	
山崎15号	円31m	△ (歩)			金銅装頭	金銅装頭	嵯風装頭	43
都賀行52-960	円38.8~38.8m	○			金銅土頭	金銅土頭	嵯風装土頭	43
都賀7号	円29.2m	○			金銅頭	金銅頭	嵯風装金銅頭	209
都賀山1号	船方地円36m	△ (歩)	少部分 金銅頭	圓	金銅装金頭	金銅装金頭	嵯風装金頭	43
都賀山2号	船方地円36m	△ (歩)	少部分 金銅頭	○	金銅装頭	金銅装頭	嵯風装	209
都賀山3号	円20m	○	金銅帶	鞍 頭	金銅頭	金銅頭	嵯風装	43
久瀬	6.9m	青	金銅頭	鞍 頭	金銅装	金銅装	嵯風装	43~209
(河内都) 岩野野鹿(近畿近畿都の可作性)							岩野野鹿	
都賀塙塚	船方後円40m	△			半 頭	半 頭	嵯風装半頭	43
大内斎聚塚	船方後円43m	△ (歩)	金銅帶		半 頭	半 頭	嵯風装半頭	43~209
都賀山1号	船方後円37m	△ (歩)	金銅帶	圓	金銅装	金銅装	嵯風装	43
都賀山33号	円31m	○			金銅頭	金銅頭	嵯風装	209
(1号都) 佐野野鹿(近畿近畿都の可作性)							佐野野鹿	
都賀塙塚	船方後円40m	△			半 頭	半 頭	嵯風装半頭	43
大内斎聚塚	船方後円43m	△ (歩)	金銅帶		半 頭	半 頭	嵯風装半頭	43~209
都賀山1号	船方後円37m	△ (歩)	金銅帶	圓	金銅装	金銅装	嵯風装	43
都賀山2号	船方後円36m	△ (歩)			金銅頭	金銅頭	嵯風装	209
(1号都) 佐野野鹿(近畿近畿都の可作性)							佐野野鹿	
西山1号	円30~36m	○			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
竹下茂間山	船方地円32.5m	△			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
都賀大土塚	船方地円43m	△ (歩)	中甲 金銅頭	圓	金銅单頭	金銅单頭	嵯風装	43
久瀬10号	円22m	○	金銅帶	鞍 頭	金銅装	金銅装	嵯風装	209
山崎2号	船方地円36m	△ (歩)			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
備註) 200m以下に副葬。後期後業-6世紀に多く、銅頭が金銅が多く、既頭が少。							備註) 200m以下に副葬。後期後業-6世紀に多く、銅頭が金銅が多く、既頭が少。	
C) 甲冑/金銅装馬具/銅鏡を持たない群小墳の装飾大刀								
(都賀の永野川流域周辺)	施主	陪葬品	馬 具	副 銅 頭	唐 潤 大 刀	安 潤 大 刀	嵯 風 安 潤 大 刀	時 期
前川村岩崎	円?	(CB)			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	217
[前崎] 金首山	円?							
小野果根1号	円16~20m	○	圓	圓	唐 潤 下 方			中 期
4-7号	円 規模不明	○			唐 潤 下 方			中 期
(都賀都)							都賀都	
西山1号	円20~21m	○			始日青 金頭?	始日青 金頭?	未収	209
砂原塙塚2号	円25m	(歩)			金銅頭	金銅頭	嵯風装	未収
都賀82号	円10m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	217
(安藤都) 佐野野鹿(梁出都の可作性)							佐野野鹿	
都賀行52-29	円18.3m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	209
都賀31号	円18m				鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	217
伊勢山12号	円18m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	209
都賀行52-92号	円22m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	209
都賀行52-92号南塚	円12×15m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	43~209
都賀山2号(長林寺)裏	円19m	○	圓	圓	金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	217
備註) 1号							備註) 1号	
前川村行52-29	円15m	○			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
(1号都) 佐野野鹿(梁出都の可作性)							佐野野鹿	
都賀本塚	円20m	○			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
小野(大津道北)	円10~12m	○			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
都賀大日堂	円15m	○			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
(都賀都) 佐野野鹿(梁出都の可作性)							都賀都	
都賀本塚	円21m	○			鞍 頭	鞍 頭	嵯風装	209
大山(古墳群)	円(木柵)	(歩)			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
都賀82号穴	縦6m	(歩)			金銅双頭	金銅双頭	嵯風装	209
備註) 1号(前岐) 2号(後岐)							備註) 1号(前岐) 2号(後岐)	

備註) 1号(前岐) 2号(後岐)

飾大刀が副葬されるような共通の事情を推定できる。

〔古墳時代後期後葉〕 後期後葉は、釣手佩用（緑佩き）や金属線巻柄・糸巻柄の大刀を主に使う段階である。TK43型式期を中心として、TK209型式期まで若干副葬される。

地域最有力首長墳の装飾大刀が袋頭つまり頭椎・円頭・圭頭大刀であること（第2表A）は、関東と東海東部に共通する（内山2019）。東方の河内地域にある下野市石橋横塚古墳も銀装円頭大刀を持つ。東に隣接する都賀地域の壬生町・栃木市吾妻古墳の銀装貴賃具も袋頭大刀を推定できる。吾妻古墳は、群馬県八幡宮親雲塚古墳や埼玉県小見真觀寺古墳のように銀装圭頭大刀を副葬していた可能性がある。銀装大刀には下



第7図 副葬品組成が類似する前方後円墳

野市別処山古墳のような倭系・折衷系円頭大刀もあるが、吾妻古墳の貴金属はロウ付け接合と見られるため、倭系・折衷系装飾大刀ではないであろう。

伯仲1号墳の鉄製円頭大刀・鉄製素環軸は、この地域最大の後期前方後円墳の副葬品としては、階層が低く感じられる。鉄製円頭・素環軸・ナデ開桺葉鐵の組み合わせは、墳長約30mの小山市坂塚44号墳と近い。墳長27.3mの鹿沼市狼塚古墳にも似た組み合わせがある（第7図）。

現在所在不明の銀装大刀が伯仲古墳群で出土していることには、注意する必要がある（第1表15番、小森1986）。天井石部分が開口していた伯仲1号墳の石室から銀装大刀が持ち出された可能性もある。仮にそうであれば、鉄製円頭だけでなく倭系・折衷系銀装大刀、あるいは銀装主頭大刀を副葬していた可能性がある。

墳径20mの赤麻1号墳は象嵌装円頭大刀（第5図中上）と、所在不明の金銅装主頭大刀が出土している。型式差のある袋頭大刀を2振副葬する事例としては、足利市足利公園龍古墳が金銅装頭椎大刀を2振持つ（豊島2019, pp.91,93）。型式差のある頭椎大刀を2振も千葉県金鈴塚古墳の石棺被葬者は、装飾大刀が必要に応じてその都度製作される品であることから、入手する機会が人生で2度あったと解釈されている（大谷2022, pp.113,116）。

（古墳時代後期末葉～終末期初頭） 装飾大刀に二足佩用（横佩き）や板金柄が多く使われる時期を、後期末葉以降として扱う。TK209型式期から飛鳥I新相期を中心に副葬される。

富田古墳では2振分の金銅装および銀装刀装具と、鉄刀破片が採集されている（第5図右・写真1）。そのうち鉄地銀張製の刀装具は、「鍔・籠一体銀張り」の籠に付着する柄巻銀線が「2列刻み三角形銀線」なので（大谷2022, pp.94-95）、銀装主頭大刀と考える。富田古墳のもう1振は、金銅製の喰出鍔・籠（はばき）・單脚足金物・鞘筒金具破片から、金銅装双龍環頭大刀の可能性がある（竹澤2014, p.34）。二振の装飾大刀を持つ点に富田古墳の優位性が見られる。軍事的性格を持って袋頭大刀あるいは倭装大刀を副葬する地域の有力者が、“二本目”の刀として外来系技術や文化に関わる環頭大刀も副葬する類型であろう（内山2019, p.77）。上三川町大山瓢箪塚古墳でも、倭装大刀+金銅装円頭大刀+金銀装單龍鳳環頭大刀の組み合わせを副葬している（黒崎2019, pp.104, 120）。

鹿島神社古墳の金銅製頭椎柄頭は畔目（うなめ）が1本であることから豊島（2019）分類の畔目I式であることはやや古い要素である。鳩目金具がないので、長脚（古墳後期末葉）か短脚（終末期）なのかは判断



左側は一体銀張の籠（左）と鍔（中央）  
右端に2列刻み三角形銀線が付着  
(銀装主頭大刀)



金銅製喰出鍔  
(推定 双龍環頭大刀)



金銅製单脚佩用金具  
(推定 双龍環頭大刀)

写真1 栃木市大平町富田古墳出土刀装具（竹澤涉氏採集 栃木市教育委員会保管）

できない。6×4cm サイズの小型品で、頭椎柄頭としては最小の大きさである。

皆川村岩崎出土の双龍型頭柄頭（第5図右下）は所在不明で、後藤（1928）が並べて拓本を掲載した足利市長林寺裏古墳の柄頭と同じ縮尺とを考えると、「中型」サイズの柄頭（豊島2017）に相当する。拓本からは施文を検討できないが、豊島分類の内向V式に相当する可能性が高い。栃木市岩崎山古墳群または岩出古墳群出土と考えられる（栃木県古墳勉強会 2012）。古墳後期末葉から終末期の装飾大刀は、群集墳内で他の古墳と大きな差がない小古墳でも多く出土するので（第2表C・第3表a）、丘陵上に群在するありふれた規模の一古墳から出土したのかもしれない。

### 3 装飾付武器・馬具出土古墳と古墳時代後期

**〔馬具と大刀〕** 栃木県域の古墳後期・終末期には、装飾大刀（54遺跡）が馬具（108遺跡）よりも少ない。この数字は象嵌刀装具を含まないが、鉄製柄頭は含めている。後期後葉には群集墳の頂点をなす階層以上が装飾大刀を副葬することが知られている（新納1983, pp.57-59; 本稿第2表B）。ただし、後で述べるように、後期末葉や終末期の装飾大刀は小規模古墳まで波及する。

装飾大刀と装飾馬具の上下は決めてくいが、装飾馬具のほうは上位層に目立つ。栃木県域全体の装飾大刀副葬古墳を3階層に分けると、装飾大刀副葬古墳のうち、最有力首長墳と準有力墳は金銅装馬具を副葬することが多い（第2表A・B）。装飾大刀副葬小型墳は金銅装馬具をもたず、鉄製馬具も少ない（第2表C）。

馬具は、馬を維持する財力、生得的な上位層を示す可能性がある。装飾のない轡・鉄刀を見た場合、鉄製轡が上位で、鉄刀は下層まで広く副葬される。馬具よりも鉄刀が小規模古墳まで副葬される理由を、軍事編成の下位層が歩兵だからと説明することが多い。

**〔中小規模墳と大刀〕** 装飾大刀副葬古墳のうち、中規模・準有力墳は古墳後期後葉に多く、小規模墳は古墳後期末葉から終末期に多い。第2表右端の「時期」欄に、それがよく現れている。装飾大刀が（1）群集墳被葬者層まで首及浸透してゆく側面と、（2）装飾大刀副葬古墳に限らず古墳全体の規模が後期後葉から終末期にかけて縮小してゆく側面（第3表d→e）との、二つを反映しているのだろう。（1）は、装飾大刀出土古墳が首長墓型から群集墳型へ移行するという指摘（新納1983, pp.60-61）と関連し、政治・軍事編成が下層へ進む状況を示している。

古墳後期末葉以後、7世紀の関東では、馬具を持たない一般的な群小墳でも装飾大刀が出土する（第2表C）。装飾大刀副葬の有／無が、7世紀の古墳被葬者層を上／下に二分する明確な指標になるのか、不明瞭な事例を含んでいる（第3表）。近畿中央政権や地方首長による下位層の軍事編成=徵兵は、地域社会から働き手を奪い、危険な業務に従わせる迷惑行為である。高い地位や家格とは別に、「弓の名手」「剣の達人」のような技術・能力・手柄を理由に装飾大刀を入手する場合が7世紀に増えたのであれば、下位層の軍事編成・勤員に魅力を惹う手段として有効だったかもしれない。軍事勤員と引き換えに古墳築造や大刀保有を下位層まで認めることで、群小墳や装飾大刀副葬が増えた。そして、本来は高い地位を表していた古墳や大刀の意味が変質した7世紀後半に、群集墳と金銀装大刀が衰退消滅するのだろう。

**〔平地の後期有力墳と中期古墳〕** この地域では、古墳後期後葉・末葉の有力墳の多くが平地にある。金銅装馬具を出土した第1図8・12・14・18、金銅装大刀では2・8・12・15・18が該当する。後期前葉・中葉の有力墳も、丘陵上ではなくて丘陵裾と平地の境にある（6・7）。これに対して、後期群小墳は丘陵上に多い（秋元2016, p.23）。永野川流域の古墳全体は、平地につくる中期から、丘陵に多い後期へ、立地の中心が移る。

丘陵上の装飾馬具・装飾大刀出土古墳は3と5だけで少ない。5の「皆川村岩崎」は岩崎山丘陵か岩出丘

第3表 古墳時代後期末葉・終末期の群集墳の古墳規模と装飾大刀

a) 桶木黒塚全体 新相装飾大刀出土古墳 (TK209-飛鳥II期)

凡例:番匠峰1号21→番匠峰1号墳/墳径21m

番匠峰1号21					
根本完塚20					
赤塚1号20					
長堤大日堂15	黒持台29号19	括延塚北1号25			
朝日觀音5号15	長林寺裏19	足利公園1号22			
足利公園西南15	伊勢山15号18	荒久台12号22			
藤井85号10	吉聖大澤遺北13	西方山3号21			
往6~10m	往11~15m	往16~20m	往21~25m	往26~30m	往31~35m
					往36~40m
					往41~45m

b) 小山市西高椅遺跡 後期末葉 (TK209)

凡例:111号(24.0)飾刀→111号墳/墳径24.0m/金銅装or鉄装大刀断面

111号(24.0)飾刀	飾刀-鉄装大刀の金銅製貴金属						
K18号(24.0)							
92号(23.8)							
113号(22.0)							
53号(15.3)	44号(21.5)馬具						
K15号(推15)	馬具-鐵製鉗具						
71号(19.2)							
106号(14.6)							
K22号(19.0)							
84号(13.6)	104号(21.5)						
K7号(推13.5)	K31号(推30)						
105号(15.5)	39号(21.0)						
	K13号(30.0)						
	66号(21.0)						
	K13号(30.0)						
	K6号(28.0)						
	35号(32.0)						
	109号(35.8)						
往6~10m	往11~15m	往16~20m	往21~25m	往26~30m	往31~35m	往36~40m	往41~45m

(小山市・とちぎ未来づくり財团2018-2020『西高椅遺跡』)・2・3)

c) 小山市西高椅遺跡 終末期 (飛鳥I新・II)

馬具-鐵製鉗具または鉗破片

112号(23.7)馬具

K12号(11)	K8号(20)	110号(21.0)	K5号(30)
往6~10m	往11~15m	往16~20m	往21~25m

(小山市・とちぎ未来づくり財团2018-2020『西高椅遺跡』)・2・3)

d) 佐野市黒持台遺跡 後期後葉-末葉 TK43-TK209(無袖・両袖長方形石室段階)

SZ1(25.7)			
SZ5(24.0)			
SZ019(23.0)			
SZ723(22.7)			
SZ8(11.2)漆器	SZ722(17.6)	SZ725(22.3)	SZ3(30.4)
SZ018(10.2)	SZ094(推17)	SZ14(25.2)	SZ260(36.9)漆器
SZ526(推10)	SZ63(10.9)		
SZ82(推10)	SZ697(10.6)		
SZ086(9.2)	SZ41(推10+)	SZ29(19)馬具飾刀	SZ15(22.3)漆器
		SZ50(16.2)飾刀	SZ22(20.6)
往6~10m	往11~15m	往16~20m	往21~25m
			往26~30m
			往31~35m
			往36~40m
			往41~45m

(栃木県教委・とちぎ生涯学習文化財団2001『黒持台遺跡』・佐野市教委・とちぎ未来づくり財団2017『黒持台・黒持前遺跡』)

e) 佐野市黒持台遺跡 後期末葉-終末期 TK209-飛鳥II(胴張形石室段階)

SZ57(推15)			
SZ33(14.2)			
SZ38(13.1)			
SZ017(12.2)			
SZ30(11.0)			
SZ018(10.2)	SZ094(推17)	馬具-素襷帶	
SZ526(推10)	SZ63(10.9)	飾刀-鉄装大刀の金銅足金具・銀張貴金属・盾等	
SZ82(推10)	SZ697(10.6)	象嵌-粗象嵌繩および貴金属	
SZ086(9.2)	SZ41(推10+)		
		SZ29(19)馬具飾刀	SZ15(22.3)漆器
		SZ50(16.2)飾刀	SZ22(20.6)
往6~10m	往11~15m	往16~20m	往21~25m
			往26~30m
			往31~35m
			往36~40m
			往41~45m

(栃木県教委・とちぎ生涯学習文化財団2001『黒持台遺跡』・佐野市教委・とちぎ未来づくり財団2017『黒持台・黒持前遺跡』)

陵の群集墳と推定できる。新式の双龍環頭大刀が群小墳で出土すること（松尾 2001, pp.88-89; 菊地 2010, pp.102-105; 穴沢他 1990, p.217）と関係するのだろう。足利市長林寺裏古墳（第5図右下）も、丘陵斜面の群集墳の一基である。

後期有力墳が平地にあることは、第1図に□○で示した中期古墳の大半が平地にある状況を継承している。馬具と銅留短甲を出土した中期後葉～末葉の小野東根所在中期古墳（11）と、後期前葉・中葉の小野東根4号墳・1号墳（10・9）の関係がわかりやすい。伯仲1号墳（14）は中期の蛭沼古墳群・赤麻1号墳（18）は中期後葉の赤麻愛宕塚・愛宕塚南古墳に接続した平地部に、一世紀ほど後で後期の有力墳を造る。

伯仲1号墳の場合、二世紀前の墳長96mの前方後方墳である山王寺大樹塚古墳も南東近くにある。複数世代もの年代差をあけて、伝説上の偉大な始祖の墓の近くに古墳群を築くことで、ある種の地位や社会的立場を明示する現象が各地でみられる（土生田 2010, pp.60,63-64,71-72）。前期の足利市小曾根浅間山古墳（墳長58m）と後期の永宝寺裏古墳（長66m）、前期の大田原市下侍塚古墳（長84m）と後期の侍塚1号墳（長40m前後）にも類似した関係が推定できる。永野川上流の丘陵から石室材を調達する社会的関係も持ちながら、下流の平野部に伯仲1号墳を築くことが、地域最大の後期前方後円墳被葬者にふさわしい選地だったのだろう。

#### 【謝辞】

栃木県古墳勉強会と横断研究会の皆様から多くの御意見・御教示をいただきました。また、大谷宏治・菊地芳朗・黒崎淳・小森哲也・瀧瀬芳之・趙辰元・島田直博・橋本道朗・橋本達也・藤村翔・宮代栄一の皆様から資料や情報を提供していただきました。お礼を申し上げます。

#### 【参考・引用文献】

- 秋元陽光 2016「栃木県赤津川・永野川流域の古墳群」『群集墳展開の共通性と地域性－王權・地域首長と群集墳被葬者－発表要旨資料』第21回東北・関東前方後円墳研究会大会, pp.21-35
- 秋元陽光・大橋泰夫 1988「栃木県烏島神社古墳について」『栃木県考古学会誌』第10集, pp.37-49
- 秋元陽光・斎藤弘 1982「栃木県立栃木高等学校所蔵の古墳出土遺物について」『栃木県考古学会誌』第7集, pp.75-83
- 穴沢暁光・馬目順一 1990「足利市西宮町長林寺裏古墳（機神山22号墳）出土の双龍環頭大刀」『古代』第89号, pp.208-226,
- 飯田光央・秋元陽光 2003「赤麻古墳出土埴輪の再検討」『峰考古』第14号 宇都宮大学考古学研究会, pp.19-34
- 岩舟町教育委員会（常川秀夫）1988「小野東根古墳群4号墳」岩舟町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 内山敏行 2011a「中期後半から後期前半の下毛野」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊 17 雄山閣, pp.57-66
- 内山敏行 2011b「毛野地域における六世紀の渡来系遺物」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学別冊 17 雄山閣, pp.142-147
- 内山敏行 2017「栃木県域の馬具と鏡塚古墳」『馬具鏡塚古墳の諸問題』第22回 東北・関東前方後円墳研究会 大会 シンポジウム, pp.61-74
- 内山敏行 2019「大刀・甲冑・馬具からみた関東と東海東部の首長墓」『賤機山古墳と東国首長』季刊考古学別冊 30 雄山閣, pp.65-78
- えびの市教育委員会（橋本達也編）2021『えびの市 岛内 139号地下式横穴墓』II
- 大谷晃二 2020「第4節 装飾付大刀 23まとめ」『千葉県木更津市 金鈴塚古墳出土品再整理報告書』木更津市教育委員会, 本文編 pp.254-267
- 大谷晃二 2022「金銀装大刀からみた金鈴塚古墳の被葬者像」上野祥史編『金鈴塚古墳と古墳時代社会の終焉』六一書房, pp.81-120
- 大平町教育委員会（大和久義平）1974「七廻り鏡塚古墳—栃木県下都賀郡大平町一」, pp.43,47,70
- 大谷宏治 2020「磐田市合代島古墳出土馬具の研究」『研究紀要』第7号 静岡県埋蔵文化財センター, pp.1-14
- 大谷宏治 2021「いわゆる「複環式鏡板付櫛」の研究」『地域と考古学』II 向坂鋼二先生米寿記念論集刊行会, pp.435-

452

- 大谷宏治 2022 「須津古墳群における馬具陪葬古墳被葬者の性格」『須津 千人塚古墳』富士市埋蔵文化財調査報告第 74 集 富士市教育委員会, pp.93-112
- 大和久麗平 1971 「栃木県における横穴式石室と馬具の変遷 (II)」『栃木県史研究』2, pp.37-50.
- 小山市教育委員会 (鈴木一男) 2001『飯塚古墳群』III-遺物編・ 小山市文化財調査報告書第 44 集, pp.68-127 (44 号墳)
- 小山市・とちぎ未来づくり財团 (内山敏行・森原浩志編) 2018・2019・2020『西高崎遺跡』1・2・3
- 折原寛 2020 「栃木市七ツ塚古墳群の再検討」『生産の考古学』III 六・書評 pp.175-188
- 菊地芳朗 2010 「第 3 章 装飾付大刀の系譜とその展開」『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会, pp.69-110
- 金子大 2017 「第 8 章 日本列島出土初期装飾付環頭大刀の系譜」『金工品から読む古代朝鮮と倭』京都大学学術出版会, pp.257-288
- 倉田芳郎はか 1972 「七ツ塚 2 号墳」『東北総貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県教育委員会, pp.55-76
- 黒崎淳 2000 「群集墳の時代」栃木県立しまつけ風土記の丘資料館, pp.6, 9, 14, 19, 23, 32
- 黒崎淳・小森牧人 2014 「芳賀の歩けオジスト」佐藤行成の業績とその生涯 (1) - 行成資料と芳賀郡の市史・町史-『栃木県考古学会誌』第 35 集, pp.87-109
- 黒崎淳 2019 「埋蔵物記」にみる栃木の古墳 (2)『栃木県考古学会誌』第 40 集, pp.97-120
- 後藤守一 1928 「原史時代の武器と武装」『考古学講座』第 6 卷 雄山閣
- 小森哲也 1986 「真岡市根本兜塚古墳出土の頭椎大刀について」『真岡市史案内』第 5 号 真岡市史編さん委員会, pp.1-12
- 小森哲也 1991 「第 4 章 古墳文化の成立と展開 第四節 天王塚古墳の時代」『益子町史』第六巻 通史編, 益子町発行(栃木県芳賀郡), pp.168-185
- 小森哲也・中村享史 1989 「栃木県における横穴式石室の受容」『東日本における横穴式石室の受容』第二分冊, p.811
- 小森紀男・黒田理史 1989『横穴式石室の世界』栃木県立しまつけ風土記の丘資料館第3回企画展 栃木県教育委員会, p.13 (小野果根 1 号墳)
- 埼玉県立さきたま資料館 (岡本健一) 編 1997『將軍山古墳 史跡埼玉古墳群整備事業報告書 - 史跡等活用特別事業 -』確認調査編・付編 埼玉県教育委員会
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 (渡邊理伊知) 2022『行田市 北大竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 477 集
- 佐野市教育委員会・公益財團法人とちぎ未来づくり財团 (太田嘉弘・中村享史) 2017『黒袴台・黒袴前遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第 49 集
- 山陽町教育委員会 (宇垣匡雅・高畠富子編) 2004『正崎 2 号墳』山陽町教育委員会 (岡山県赤磐郡)
- 高橋勇 1917 「栃木県赤沢村の古墳に就て」『考古学雑誌』第 8 卷 2 号, pp.42-45
- 竹澤涉 2014 「栃木市大平町富田採集古墳遺物について」『栃木県考古学会誌』第 35 集, pp.29-37
- 田代善吉 1939『栃木縣史』卷十二 考古編 下野史誌會
- 田中祐樹 2015 「古墳時代補修痕馬具分析の可能性 - 馬具実用品論試考 -」『土曜考古』第 37 号, pp.23-36
- 千賀久 1996 「日本出土の非新羅系馬具の系譜 - 大加耶圏の馬具との比較を中心に -」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 110 集, pp.283-307
- 趙晟元 2019 「金官加耶考古学の研究成果と流れ」『韓国古代史研究』94 (韓国語), pp.49-85
- 東京国立博物館編 1980『東京国立博物館開館目録』古墳遺物篇 関東 I
- 栃木県教育委員会 (海老原郁雄・鈴木勝・山井邦人) 1981『甲塚西遺跡』『県宮圓場地内遺跡発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第 41 集, pp.21-29, 37-49, 52
- 栃木県教育委員会・とちぎ生涯学習文化財団 (橋本澄朗・芹澤清八・仲山英樹・斎藤恒夫・竹前大輔) 2001『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第 261 集
- 栃木県古墳勉強会 2004『中山 (符門靈神) 古墳調査報告』『栃木県考古学会誌』25, pp.97-115
- 栃木県古墳勉強会 2005『中山 (符門靈神) 古墳調査報告 2』『栃木県考古学会誌』26, pp.71-91
- 栃木県古墳勉強会 2012『栃木市岩出古墳測量調査報告』『栃木県考古学会誌』第 33 集, pp.43-72
- 栃木県古墳勉強会 2018『栃木市船舟 1 号墳 (長山古墳) 調査報告 1』『栃木県考古学会誌』第 39 集, pp.21-41
- 栃木県古墳勉強会 2019『栃木市船舟 1 号墳 (長山古墳) 調査報告 2』『栃木県考古学会誌』第 40 集, pp.25-57
- 栃木市教育委員会 1990『栃木市遺跡詳細分布調査報告』, p.105 (八幡社古墳)

- 豊島直博 2017「双龍環頭大刀の生産と国家形成」『考古学雑誌』第99卷第2号, pp.51-87
- 豊島直博 2019「頭椎大刀の生産と流通」『考古学雑誌』第102卷第1号, pp.77-121
- 奈良大学文学部文化財学科（豊島直博編）2020『坊主山古墳群出土品報告書』奈良大学考古学研究調査報告書第25冊
- 新納泉 1983「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30卷第3号, pp.50-70
- 土生田純之 2010「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集（1）九州古文化研究会, pp.59-73
- 濱田耕作・梅原未治 1923「日本発見刀劍環頭聚成」『近江國高島郡水尾村の古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告第八冊, p.108 と附録図版第三
- 肥田翔子 2021「島内139号地下式横穴墓出土馬具のセット検討」『えびの市 島内139号地下式横穴墓』II えびの市教育委員会, pp.45-49
- 藤岡町教育委員会（尾島忠信）1985「藤岡町跡遺跡詳細分野別調査報告書」藤岡町文化財報告書第2集, 口絵およびpp.32-35（赤坂古墳）, p.52（伊勢山古墳）
- 藤岡町史編さん委員会編集（橋本澄朗・岩淵一夫・津野仁・尾島忠信・手塚達弥）2003『藤岡町史』資料編 考古 藤岡町発行（橋木県下都賀郡）
- 前澤輝政 1955b「地下式堅穴石室」調査報告-・橋木県下都賀郡岩舟村中の島出土』『古代』28, pp.14-22
- 前澤輝政 1973「下毛野国曲ヶ島古墳群-・橋木県下都賀郡岩舟町曲ヶ島所在」『古代』55, pp.1-17
- 前澤輝政 1973「足利公園古墳群中西南部円墳」『古代』45・46 合併号, pp.41-50
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団（戸所慎策・足立聰）1995「B区 内堀4号墳」『内堀遺跡群 X - 大室公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』-・前橋市教育委員会, pp.10-40
- 松尾充晶 2001「第6章 装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書10 島根県教育委員会・島根県古代文化センター, pp.77-91
- 三木文雄 1974「王墓山古墳の遺物」『倉敷考古館研究集報』第10号, pp.190-198
- 宮代栄一 1997「古墳時代の面彫構造の復元-X字脚辻金具はどこにつけられたか-」『HOMINIDS』Vol.001 CRA, pp.49-70
- 宮代栄一 2015「長野県出土の馬具の研究・北信出土の環状鏡板付轡を中心に-」『信濃大室横石塚古墳群の研究』IV 考察篇 明治大学文学部考古学研究室・六一書房, pp.99-133
- 宮代栄一 2016「馬具でなくなった馬具・古墳時代後期における馬具の構造形態をめぐる一考察-」『駿台史学』第157号, pp.47-67
- 安永真一 2001「狼塚古墳」『鹿沼市史』資料編 考古 鹿沼市, pp.293-316



---

**研究紀要 第31号**

発行 公益財団法人 とちぎ未来づくり財団  
埋蔵文化財センター

〒329-0418  
栃木県下野市紫474番地  
TEL 0285(44)8441(代表)  
FAX 0285(43)1972  
HP : <http://www.mai bun.or.jp>

発行日 令和5(2023)年3月30日発行  
印 刷 株式会社 泰明グラフィクス

---